

第 4 章

分科会活動

アジア太平洋地域における日米安全保障

Regional Security in a Global Era

■分科会メンバー

飯島千咲*

中村優太

森泰子

吉井拓真

吉田知史

Patrick Meuer*

Michael Fitzgerald

Brooke Nowakowski

Jeff Yamashita

Xiang Zeng

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

冷戦終結後の世界は、国際テロ、地域・民族紛争、大量破壊兵器の拡散を始めとする複雑で不透明な問題を内包している。アジア太平洋地域においても、北朝鮮の核開発、台湾海峡有事の懸念など依然として多くの不安要素が存在する。近年、中国の軍事的台頭と強硬な海洋進出は、南シナ海で領有権問題を引き起こし、日本との関係においても、尖閣諸島をめぐり政治的緊張が高まっている。普天間基地移設問題の迷走により日米関係が停滞し、日本の外交力強化が必要とされる中、このような脅威にどのように対処していくかが今後の大きな課題となっている。当分科会では、旧安保条約締結から現代に至るまでの日米安保の歴史を踏まえ、国際情勢の変容に伴い、日米同盟における役割分担を再評価

し、アジア太平洋地域の平和と安定のために、日本はどのような機能を独自に果たすべきか、また米国とともに構築すべき安全保障体制とは何かを模索する。

■事前活動

春合宿

学年、学校、専攻も異なる五人が集まり、本会議にむけて不安と期待が入り混じる中、分科会は始まった。事前にお互い文面での自己紹介を終えていたが、正直当初は、どんなメンバーなのかと不安は大きかった。しかしいざ始まると、そんな不安はいつしか無くなり、皆で集まり話すのが楽しくて仕方がなかった。各人、個性を持ち輝いている皆の意見を聞き、自分の意見を言うことが本当に至福の時間だった。もちろん、今後の方針や各人の知識の差等まだまだ課題はある。個人としての課題もたくさんあ

る。そういった課題がいくつも浮かび上がってきても、それでも私は楽しんだ。今までもずっと継続されてきた日米安全保障の分科会。私たち5人ができることを懸命に考え、追い求めていけば自然と今までで最高のものが出来上がるのではないかし、最高なものにする。(吉井拓真)

元サハリン日本センター所長

岡林一郎様訪問

日時：6月8日(土)

場所：埼玉県内公民館

私たちの分科会はメンバーが住む地域がバラバラで、残念ながらこれが唯一のフィールドトリップであった。

今回の内容は、ロシアの専門家で、元サハリン日本センター所長の岡林一郎様に「ロシアとの関係を発展させようと模索する日本・中国が互いに対立する中、ロシアは日中関係、ひいては東アジアの国際秩序にその影響力を行使しようとする意図があるのか」という疑問点を中心に、お話頂くというものでした。

ロシアは、日中関係をどう動かそうなどということはあまり考えていない。しかし、「中国は伝統的な同盟国であり、伝統的な脅威とも感じている」というロシアの対中認識があり、日本に対しては技術面での協力だけでなく、安全保障面でも中国に対するヘッジとしての機能に期待している、という旨をお話頂きました。

岡林様は、人生の半分をロシアで過ごされたということで、ロシア人の視点での国際情勢の認識を詳細に説明されました。文章に載らないような細かなところで、その様な点が散見され、これは非常に貴重な情

報でした。

最後になりますが、岡林様をご紹介頂いた伊藤忠商事OBである降旗健人様・中川様に感謝申し上げます。ご協力頂き本当にありがとうございました。(吉田知史)



岡林一郎様と

直前合宿

今まで3か月の準備期間にて自分たちがどのような軌跡を描いてきたか、本会議で何を議論したいか等をスライドにまとめて他のRTメンバーに発表する準備から始まった。この作業は私達にとってとても重要なものとなった。今までただただ夢中に試行錯誤して進んできた道のりを細かく振り返ることで、一つ一つの議論の重要性、そして全体の流れを再確認することができた。そして発表後、周囲からの質問や指摘を本番に活かすと誓い、メンバー内だけでお互いの胸の内を語り合った。それは期待と不安の入り混じるものであった。(吉井拓真)



本会議前初めてのRTジョイントミーティング

■本会議中の活動

日本側参加者の中には安全保障分野を専門としている者が少なく、また議論に臨めるほどの知識量も備えていなかった。そこで日本側参加者では本会議前までに知識の補充と議論の方法を毎週テレビ電話で行うことにした。外交問題について議論をすることを目標とし知識の補充は話し合いの末何冊かの本を担当ごとに要約し、毎週のミーティングで共有することにした。そして、議論を行う知識を補充したところで実際に問題を提起し議論に舞台を移そうとしたが、議論の方法や JASC をどのように終わりたいのか、どのような形で最終報告をしたいのかということに時間を多く費やしてしまい、実質的な議論ができたのは正味1回のミーティングだけだった。実際の議論を重視する立場と方法論を重視する立場とに二分してしまい、分科会始まって以来最悪の状況となってしまった。その点を踏まえ、直前合宿では分科会内でリフレクションを行った。その結果、本会議にはわだかまりもなく望むことができた。また、事前準備での反省点を踏まえ、米国側参加者にいまままで日本側参加者が議論してきた方法論を提示し、本会議では実質的な議論を行うことを提案することにした。

本会議最初のサイトとなる京都では、日本側参加者が春合宿から本会議までに至る準備の成果を共有した。日本側参加者と米国側参加者でバディを組んでおり、互いの RT ペーパーの要約を最初の時間で共有し、ペーパーへの質疑応答や各人が使用した言葉の意味、定義を確認した。全員完全に一致する項目ではなかったものの、非常に興

味深く、また昨今の国際情勢を反映していた。そして、ファイナルフォーラムを目指していく上で日本側、米国側の安全保障に関する基本的な質疑応答を繰り返した。

京都サイトで議論を行う上でのウォーミングアップが終わったので、長崎サイトでは実際の議論を行った。日本側が提示した方法論を米国側はおおむね受け入れてくれたこともあり、無駄のない深い議論を行うこととした。しかしながら実際には、事前準備での反省が生かされず、双方ともに議論を行いたいのは共通の認識であるのにもかかわらず日本側が方法論に固執してしまい議論が一向に進まなかった。また、ここで問題に取り組む学術的なアプローチの方法が日本側と米国側では顕著に違うと認識させられた。

一向に進まない議論に双方焦りを感じ、分科会の雰囲気最悪になっていた。分科会の中で3つのグループに分割しそれぞれのセクションで議論を交わし、その内容を全体に共有するという方式になった。この状況を鑑み、日本側からこの状況を改善するために RT リフレクションの時間を設けることが提案された。各人が抱く焦りやいらだち、葛藤を洗いざらし告白した。終わりには自然と涙も出て、互いに抱き合っていた。そのとき、もっと早く言っていればよかったと思った。多くの講演会、施設訪問、地元の方々との交流と疲れているなかでの分科会活動であったが最終的にはどの分科会にも負けない素晴らしい発表ができたと自負している。分科会と通じて得た経験は今後の人生の大きな糧になるであろう。

(中村優太)



初めての RT タイム

ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムは分科会にとって一つの直近の目標となる。1 か月間議論した内容を 15 分のプレゼンテーションにまとめて発表するため、発表の方向性を決める時点から意見が割れて難航した。議論は何度も行き詰まったが、次第に形が見えてくるにつれて皆のやる気もスピードも上がっていった。話し合いを十分に重ねることも大切だが、それと同時に「とりあえず始めてみる・進めてみる」ことで意外と良い方向に進み解決の糸口が見えることもあると学んだ。

最終的に、スライドを作るのが得意な人、プレゼンに慣れている人、具体例についての知識を沢山持っている人等々、皆がそれぞれの力を発揮して、本番を終えた後の達成感と一体感は特別だった。

ファイナルフォーラムは目に見える形で結果が残るので、効率性や結果に目が行きがちだが、それだけでなく、日米の学生が、時には互いの力を借り、時には周りを助けながら、共に協力し合うことの大切さも実感できた。(森泰子)

■分科会感想

日米学生会議の分科会を決める際に今日の日米問題を考えると一番初めに安全保障分野が思い浮かんだ。先の民主党政権による沖縄基地問題が日米同盟の存在意義に疑問を投げかけ、日米関係の不安定化が日本周辺国のナショナリズムの高揚と軍事力の台頭、その結果として竹島や尖閣諸島などの主権侵害など極東地域の平和と相互共存の繁栄に影響をもたらしていると感じたからである。

春合宿の顔合わせから本会議まで約 3 か月間、日本側参加者が関東圏、関西圏、九州圏にそれぞれが在住していることもあり直接顔を合わせて準備を行うことができなかった。そのため、テレビ電話を介してのミーティングや SNS を使用した連絡を行った。

本会議最初の分科会活動ではいままで日本側参加者が 3 か月間してきた準備の成果を米国側参加者に共有した。日本側参加者は頻繁に連絡を取り合い、他の分科会よりも米国側参加者を受け入れる用意はできていた。しかしながら首尾よくいかず、米国側参加者とは何度も衝突し、現実逃避したことは幾度とあった。そのとき、励まし合ったのは同じ分科会の日本側参加者だった。ときには葛藤や衝突を経験したからこそ互いの気持ちを汲み取り涙した時もあった。

いま振り返ると分科会活動は平坦な道ではなく多くの壁を乗り越えてきた。そしてそれらを乗り越えるたびにみんなの絆は一層強くなっていった。そして最後に米国参加者が僕達に言ってくれた “We are Family.” 今でも忘れられない。(中村優太)

3 か月間、毎週のミーティングやフィールドトリップ、個人で書く RT ペーパーなどを通して、知識を深めると同時に、日本側参加者同士の仲間意識も深まった。日本側だけでも意見がぶつかり議論も難航したが、本会議前までにはお互いを理解し合い良いチームが出来上り、アメリカ側を迎える準備が整っていた。

アメリカ側参加者は皆とても頭の回転が早く個性も強い人達だったため、最初の方はやはり意見が衝突し、ようやく妥協点を見つけてもなかなか皆が一つにまとまらなかった。もちろんファイナルフォーラムで良い結果を残すことも大切だが、せっかくのこの1か月間、皆で目標に向けて協力するプロセスも同じくらい大切にしたい、という気持ちがあったため、まとまらない分科会に対して焦りを感じて悩んだ。しかし、やはりメンバー全員に自分の想いを伝えたいと思い、分科会の時間に、分科会・皆にどうあってほしいか、と問題提議をして自分の考えも伝えた結果、それに応じて皆も本音を伝えあい、目標を再共有できた。このプロセスを経たことで、お互いを理解し認め合い、ファイナルフォーラムに向けての再スタート、そしてその後もずっと続く信頼関係を築くことが出来たと感じている。時間もかかったし決して簡単ではなかったが、専門分野も住む場所も違うそれぞれの個性が生きた本当にユニークな分科会だったと思う。この分科会で1か月間頑張れたことはかけがえのない貴重な経験になった。

(森泰子)

私が参加した分科会のテーマは、会議に参加するまでに学習したことも、興味・関

心を抱いたことも少なかった。しかし、同じ分科会にはそれを専門にするメンバーもいて、開始当初からメンバー内での知識の差は歴然としていた。そのことから各人意見の頻度や積極性が大きく異なり、その中での自分の役割を考えた。このテーマにおいて詳しくない自分が1人の一般人として出せる純粋な疑問や意見、質問を出すこと。メンバー1人1人の個性を把握し、各人の良い所を引き出し、苦手な所を補い合うこと。1つ目。毎回のミーティングで課題を各自こなした。テーマに関する計4冊の本を読み、知識を補充し、英単語を覚える。分科会で1番知識がなかったのが必死で取り組み、意見や質問を積極的にぶつけた。本会議では病気によるドクターストップによって、ほとんど参加することはできず、自己の価値観を反映させることができなかったのは残念だが、この「0からの勝負」という経験は将来必ず生きると確信している。2つ目。メンバー4人の個性は強かった。性格、目標、問題意識全てが違う。最初から試行錯誤が続いた。個人的には分科会の議論に加え、各個人の特性を把握するべく個人同士の会話の時間を大事にしたかったが、それよりも分科会の議論を進めようと焦ったり、あまりに個人が忙しかつたりと、そういった時間をとれず、結果として問題が大きくなってから話し合うことが多かったのではないかと思う。反省することは多くあるが、総じていい経験になったと思う。(吉井拓真)

苦勞することが本当に多い。そんな RT でした。勿論、苦勞のない RT などないことは承知しています。それでも、個性の非

常に強いメンバーが多いこの RT が 1 つに纏まっていくことは困難で、最後まで本当に苦しみました。

表情の違いや語気の違いは人それぞれなのですが、それをどう受け取るのか、どこまで受け入れるのか等が、文化的差異を生み出すのでしょうか。例え、言葉が言葉として通じていても、相手がどういった感情を抱いているのかということを通常のコミュニケーションだけで読み取ることは、その様な障害によって非常に厳しいものでした。

更に、長崎サイトの途中でメンバーの 1 人が体調不良で離脱せざるを得ず、私自身も体調を崩し 1 週間以上も活動に参加できないということもありました。この悔しさや、他のメンバーに迷惑をかけてしまったという申し訳ない気持ちを完全には払拭出来ませんでした。

しかしながら、この様な葛藤から得たものは少なくありません。悔しい気持ちは、疲れた身体・頭を鼓舞し続け、日を迫る毎に私の思考をより深いところへと導き、物事を見る視点をより広いものにしました。この経験は、私の血となり骨となり、これから様々な困難に立ち向かう際、必ず役立つでしょう。

最後に、こんな自分を日米学生会議参加者として選んでくれた飯島千咲をはじめ、全ての RT メンバーに感謝申し上げ結語とさせていただきます。ほんまにありがとう。

(吉田知史)

■分科会総括

以前から日本の外交力の弱さが指摘されている中、中国の軍事的台頭や領有権問題など、数多くの不安要素が存在する今日の

アジア太平洋地域において、日本が独自に果たすべき政治的機能や、構築すべき安全保障体制を模索する必要性と重要性がより一層高まってきている。JASC において、日米安保をテーマとして扱う分科会は最も伝統ある分科会と言っても過言ではないだろう。第 65 回を数える今回は、その議論の対象を日米二国間関係のみならず、アジア太平洋地域にまで拡大し、マクロな視点で捉えることによって、変わりゆく国際情勢に見合った安全保障体制とは何かを再考することを目指した。

この分科会の一番の魅力であると同時に最大の壁となったのは、所属メンバーの多様性ではないだろうか。全員が学年も違えば、専攻も経済学・法学・政治学・医学と異なり、住んでいる地域も東京・京都・岡山・福岡とバラバラであった。安全保障という難しいテーマであるが故に、当初は専門性の違いによるメンバー内での知識の偏りが大きくあった。関東在住者が主として構成された他の分科会のように、気軽に直接会って意見を交わすことができない難しさや、議論が思うように前に進まないもどかしさを全員が感じていた一方で、それぞれが分科会における自分の役割を問いながら、どうしたらよりよい分科会になるかを真剣に考えてくれていた。

本会議では、日米両国のメンバーの興味分野と照らし合わせながら、安全保障という大きなテーマから、①尖閣諸島をめぐる政治的緊張の高まり、②沖縄問題、③日本の自衛隊という 3 つのケーススタディを選び、軍国主義とナショナリズムの観点よりそれぞれ検証した。メンバーの体調不良に悩まされたり、言語の壁に衝突し、文化の違い

に悩んだりと議論は一筋縄ではいかなかったが、メンバー一人ひとりの優しさや分科会を想いやる気持ちの強さのお陰で、ファイナルフォーラムでは1ヶ月の成果を立派に発表することができ、コーディネーターとして本当に誇りに思う。

毎日の生活の中で、日米同盟や安全保障論について深く考え、誰かと真剣に議論し合う機会は、ごく限られた人を除いてそう多くないだろう。JASC はこのように、見えにくい問題や意識しづらい問題を、学生という自由な立場から真剣に考え、議論し合う機会を与えているという点でも、非常に大きな役割を果たしている。この分科会活動を通して得た知識、経験、そして友情が、メンバーそれぞれの将来にどんな形であれ息づいていくことを心から願っている。

最後に、FT を快く受け入れて下さった岡林一郎様、私と共に分科会を引っ張ってくれた RT パートナーの Patrick、またこの分科会を応援して下さいました全ての方々へ心からの感謝を申し上げ、分科会総括と致します。(飯島千咲)

グローバル化と食の安全保障

Globalization and Agriculture in the 21st Century

■分科会メンバー

横田真彩*

荒木尊士

上江洲仁美

木村優吾

中澤彩

So Nakayama*

Emily Aiken

John Burke

Haley Sweeton

Paxton Misra

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

私たちに欠かせない「食」を取り巻く問題は、グローバル化に伴い世界規模で解決が求められている。世界の総人口が2050年までに90億人を突破すると予測される中、急激な人口増加や気候変動は食の安全確保を脅かし、国境を越えた食料の流通が重要になっている。各国は自由貿易の推進により経済成長を求め、二国間あるいは多国間で農水産物を含めた自由貿易協定（FTA）が締結され、日本でも環太平洋経済連携協定（TPP）交渉参加をめぐり議論が交わされている。しかし、大豆や小麦のほとんどを輸入に頼り、食料全体の自給率低下が問題視されている日本では、TPP参加により「食」を支える国内農業の存立が危惧され、慎重論も根強い。また、牛肉のBSE問題に始まり、残留農薬や遺伝子組み

換え技術などにより次々に国内外で生起する食品問題は、食そのものに対する不安を生み出している。当分科会では、グローバル化が進む中、食の安全保障について、経済連携協定や各国の食の安全に対する意識や制度などを踏まえ、どのように食の安全保障を持続可能にすべきか考察する。

■事前活動

春合宿

今後の食の安全保障を議論する際に、外国から全ての食料を輸入する「合理性」と、国内で全ての食料を生産する「持続性」の二軸が存在すると考えた。戦争、気候変動という食の安全保障を脅かす課題、食料の質と量の維持といった目標を踏まえ、「合理性」と「持続性」のバランスが重要であると結論づけた。「合理性」を保つ上で輸入食

品の安全基準の見直しの必要性や、「持久性」を高める上では農業従事者を増やすにはなどといった、様々な課題や解決策を話し合った。私は「食」に対する知識が少なく、議論することに不安を抱えていたが、他の参加者も同じ悩みを抱えていることがわかった。皆で時間の許す限り議論を行えたことは、本会議に向けた活動を行う上での大きな糧となった。(荒木尊士)



春合宿解散前の様子

イオン株式会社有本様訪問

日時：6月8日（土）

場所：羽田空港

有本様のお話の中で最も印象に残ったのがフェアトレード商品のエピソードである。トップバリュは、大学生の発案によりフェアトレード商品を販売するに至り、フェアトレード商品を通じ、ドミニカ共和国コナカドの生産者、日本の消費者、販売者(トップバリュ)の三者が対等な立場で向き合え、お互いに無理をしなくてよい経済システムをつくった。さらにフェアトレード商品は現地の小学校に教員を雇う手助けをするなどコナカドの発展に寄り添っている。生産者、消費者、販売者は、自分のストーリーだけでなく、関わる相手のストーリーも理

解した上で行動することが当たり前となる時代の到来を思わせるトップバリュの揺るぎない姿勢に共感を覚えた。(荒木尊士)



イオン株式会社有本様と

大阪府立大学植物工場研究センター訪問

日時：6月21日（金）

場所：大阪府立大学植物工場センター

平成25年6月21日に大阪府立大学、植物工場研究センターを見学させて頂いた。完全人工光型植物工場とは、環境及び生育のモニタリングを基礎とした高度な環境制御を行うことにより、野菜等の植物の周年・計画生産が可能な栽培施設である。砂漠化、塩害、土壌汚染などこれまでの農業技術だけでは農作物の栽培が困難な地域においても農作物の栽培が可能となり、地域の課題を解決する可能性を秘めた技術として今、注目を集めているそうだ。SUBWAY野菜ラボ大阪府立大学店では、店内の植物工場で栽培した野菜を使ったサンドイッチが販売されており、生産地と消費地が近く、野菜は新鮮で美味しく感じた。イニシャルコストが高額など課題もあるようだが、植物工場が日本の農業を強くする技術として一翼を担うことを期待している。(荒木尊士)



当日お世話になった小倉様と

沖縄県 第一牧志公設市場訪問

日時：6月24日（月）

場所：第一牧志公設市場

RT メンバーの一人に沖縄出身の学生がいるため、その学生のお母様に第一牧志公設市場を案内していただいた。市場はまさに「昔ながらの地域に根差した市場」といったような感じで、生鮮食品や加工品が所狭しと並び、人々の活気に溢れていた。私たちは朝のとても忙しい時間に訪れたのだが、市場の方々は私たちの質問に丁寧に答えてくださった。50年近く続く老舗が多く、店の方々は沖縄の食を取り巻く環境の変化を見てきた方々だといえる。事実、大型量販店や安い海外産との差別化、若者における外食産業・加工品の人気等についてのお話を伺うことができた。私たちは公設市場を運営管理する方からもお話を伺うことができたのだが、その方も時代の変化を強く意識しており、今後公設市場の役割、更には沖縄の食文化を見直す必要があるとおっしゃっていた。「守るだけでなく進化も大事」とのお言葉がとても印象的であった。

（中澤彩）

新規就農センター訪問

日時：6月24日（月）

場所：沖縄県農林水産部営業支援課内

新規就農や農業支援に関わる西田様からお話を伺った。以前から生じていた問題ではあるが、特に TPP が話題になって以降、日本農業の持続性が危ぶまれている。農業の担い手不足、高齢化、耕作放棄地等全国で取りざたされる問題は、全て沖縄にもあてはまるようだ。加えて沖縄は決して地理的条件において恵まれているとはいえず、台風による被害も多い。ゆえに公的機関の農家への支援は欠かせないものであると思うが、実際沖縄県は、就農を考えている人から、新規就農者、ベテランの農家さんまで一貫した支援体制を構築しており、最大限の支援を行っているとのことであった。自然環境のリスクだけでなく、今後貿易が自由化されていく中で新たなリスクが生じてくるであろう。その際、企業の参入や新技術の開発等、時代に合わせて農業を変革していくことも大事であろうが、政府や公的機関の一貫した継続的な支援は以後も欠かせないものであり、農家の方々・日本農業を直接的に大きく左右すると思った。

（中澤彩）

八重洲町 花き農家 三上様訪問

日時：6月24日（月）

場所：八重瀬町 花き農家 三上様の農地

西田様のご紹介で、八重洲町にて小菊を中心に野菜・果実を栽培していらっしゃる三上様を訪問させて頂いた。小菊ならではのスプレー菊をはじめとする海外産との競合や自然災害等への対処に留まらず、農業を始められた経緯から所有者による土地の

第4章 分科会活動

貸し渋り等、新規就農者としての具体的なエピソードを交えた苦労話についても丁寧にお話し頂いた。また、事前活動の分科会の議論にて廃棄問題に触れたが、実際にご自身では無駄をなくすため加工など工夫をして出荷している他、帰り際にはお土産にと袋いっぱいのマンゴーを下さるなど、数値等紙面上の情報だけでは分かり得なかった農家の方の作物に対する思いにも触れたような気がした。本会議前に農家の方に直接お話を伺えたことは大変良い刺激となり、農業そのものの魅力を知る貴重な機会となった。(横田真彩)



沖縄県農林水産部営農支援課 西田様
八重瀬町の花き農家三上様と

ら伝わってきたことが大変印象的だった。また、食育を保健・衛生面のみから捉えることなく、文化振興や環境保全、観光等、様々な分野を横断させた政策として捉え、他地域からのモデルケースとして注目されている等、食育の可能性についてより広い視野から考え直す契機となった。また、お茶やお菓子を頂きながら楽しく双方向的な議論の場を設けて頂き、食育に留まらず人生観や目標についてお話を頂き盛り上がるなど、大変刺激的な機会となった。

(横田真彩)



墨田区役所にて当日お世話になった
皆様と

墨田区役所訪問

日時：7月12日(金)

場所：墨田区役所 5階保険計画課

墨田区役所を訪ね、「すみだの食育」について、市役所にお勤めの秋田様、またすみだ食育 good ネットにご所属の区民の方々からお話を伺った。「government から governance へ」というモットーのもと、市民の方々と行政が絆を築いた上で協働して食育を推し進めていることが、お話の中身だけでなく実際にお話をされている様子か

農林水産省訪問

日時：7月29日(月)

場所：農林水産省大臣官房食料安全保障課

霞ヶ関の駅に着き、立派な建物が立ち並ぶ風景にドキドキしながら、農林水産省 FT を行った。中に入るとテレビ局関係の方々も多くいて、さすが農林水産省だなと緊張した。大臣官房・食料安全保障課・総務班総括係でいらっしゃる、小林貴史様からお話を伺うことが出来ました。小林様からは、「なぜ、いま、食料の安全保障なのか：自

給率を考える」という資料を頂いた。その資料には、日本の食料自給率を上げる必要性や国の取り組みが初心者でもわかるようにとても丁寧に説明されていた。完璧で隙がなく、議論され尽くされた情報がそこにはあり、さすがだと思った。食料・農業・農村基本法の「将来にわたって、良質な食料が合理的な価格で安定的に供給されなければならない。」という言葉が、後の RT での議論のキーワードになった。(上江洲仁美)

日本総合研究所訪問

日時：7月29日(月)

場所：株式会社日本総合研究所 東京本社

官民間問わず様々な事業に対し、知識・経験に基づいた経営のアドバイスを行うコンサルティング会社(シンクタンク的な役割も兼ねる)である日本総研を訪ねた。今回私達がお話を伺った方々は、IT、農業分野に携わっており、革新の求められる農業界において奮闘する農家の方や地域の取り組みについて具体的にお話をして頂いた。お話を聞いているとその言葉の端々から、日本農業はもっと攻めの姿勢をもつべきだ、といったビジネス的志向が感じられた。日本には世界的に見ても優れた農作物、農業技術が存在する。日本農業は衰退の一途にあるのではなく、現在の危機をチャンスに変えて生まれ変わることができる、といった希望を今回の FT を通して私たちは抱くに至った。(中澤彩)



日本総合研究所の皆様と

直前合宿

直前合宿では、春合宿の議論を振り返り、そこから様々な FT を通して、私達の議論がどのように変化していったのかということ話を合宿した。春合宿は合理性と持続性の双方のバランスが必要であるという結論だったが、直前合宿では、それに加えて、3つの新たな視点があるという議論になった。農業文化、田舎の田園風景など多面的機能を持つ農業、フェアトレードなどの持続可能システム、人間の生を支える一方で趣向品としての役割も果たす食の二側面性。そして、本会議では私達が描く未来の理想の農業の形を議論したいという結論に至った。(上江洲仁美)

■本会議中の活動

第1サイト東京及び第2サイト長崎

ジャパデリは春合宿から議論や FT を重ね、本会議においては一体どのように議論を進めようかと頭を悩ませてきたが、やはりアメデリが合流してからの議論というのは、新たな視点も加わり、予期せぬ展開をみせた。第1サイトでは、まずそれぞれ自分の RT ペーパーについて説明したり、ジ

ヤパデリがこれまで行ってきた FT について説明したりと、情報共有の時間を設けた。アメデリは私たちが想像していた以上に日本農業について詳しく、興味を抱いており、結果議論は、就農者の高齢化や、耕作放棄地、農業のビジネス化等日本農業が現在直面する問題の検討へと進んだ。問題を項目ごとに分けて割り振り、二人組でその項目についてのリサーチ、RT 全体に向けてのプレゼンを行った。第2サイトの長崎では、それまでに共有した知識、議論をより明確に、合理的に整理するための、最終的にはファイナルフォーラムへとつながる、アウトプットの枠組みを考えた。実際は、話し合いが頓挫したり、お互い譲れない意見があったりとなかなか苦労したが、今振り返れば、どの瞬間も相互理解のためには欠かせぬ貴重な時間であった。(中澤彩)



ディスカッションの様子

第3サイト岩手及び第4サイト東京

第3サイトの岩手に入るとやはりファイナルフォーラムが直前でメンバーの顔に焦りがみえはじめた。アジェンダをしっかりと設定し、なるべくタイムロスがなくして時間を確保することを大切にした。ファイナルフォーラムの具体的な内容や発表方法で

対立が起き、農業自体の議論に割く時間が少なくなった。ぶつかり合いと妥協を繰り返し、第4サイトの東京ではファイナルフォーラムの大筋は決定した。発表用のスライドは分担してそれぞれ作成した。これまでの議論を踏まえた内容が主であり、新しく農業に関しての何かを議論したりはしなかった。全体の流れと、細かな部分のつながりを自然にすることに時間がかかった。この時感じたのが、本会議前と、第1、2サイトでどこまで議論を発展できるかが大切であるということだ。(木村優吾)

ライスアート見学

岩手県水沢市にてライスアートをされている田んぼアート実行委員会会長森岡様のお話を伺うことができた。ライスアートは20年ほど前青森で始まったそうだが、それを6年前に岩手でやりはじめたのが今回伺った方であった。ライスアートは多数の色の稲を植えて田んぼに絵をつくるアートだ。これを始めたきっかけは偶然青森に行った際に、地元でもできるのではないかと試してみたことだそうだ。今や田植えと稲刈りの時に全国から参加者を募るイベントとして知名度を広げているそうだ。その農家さんに TPP や後継者不足など農業に関する意見を聞くことができた。最も印象に残っているのは、農業について語るのならば、まずは自分の手で農業を体験して欲しいという主張であった。農業と普段接することのない都会の人こそ農業の苦労と喜びを味わってほしいということであった。ライスアートはそんな農業への感心の切り口として有効ではないだろうか。(木村優吾)



ライスアート見学の様子

ファイナルフォーラム

TPP への参加表明や農業従事者の減少という日本の農業に関する現状を解説し、「日本の農業を再生させるのはどうしたらよいか」という問題提起をした。「日本の食料自給率の向上」という解決策を、フィールドトリップでの知見を用いて生産者側、消費者側の視点から提案した。生産者側としては小岩井農場を例に、農業ビジネスによる国内食料消費や農業従事者の増加を提案した。消費者側としては、盛岡神子田朝市や岩手県奥州市農家を例に、食育による地元農家と触れ合い、地元食材の消費促進を提案した。分科会内で意見の対立などはあったが、約1ヵ月に及ぶ本会議での議論や体験を形にし、伝えることが出来た。

(荒木尊士)



ファイナルフォーラム発表後の様子

■分科会感想

日米学生会議の合格通知とともに、分科会は「グローバル化と食の安全保障」と知らされた。この分科会は第一志望であり、「食」に対する興味はあったが、知識は殆ど無かった。不安を抱えたまま春合宿に臨んだ。他の参加者も同じ悩みを抱えていることがわかり、皆で時間の許す限り議論を行えたことは、本会議に向けた活動を行う上での大きな糧となった。本会議までに8回もフィールドトリップを行った。フィールドトリップを行うことは、私たちの知見が深まり、取材先にとっても関心を持った人の存在を知ることになり、互いにとって有意義なことだと思う。知識は増えた一方、肝心の議論が進まなかった。本会議が始まれば0から議論をやり直さなければならないのではと考えると、どのように議論を進めていいかわからず、焦りだけが募った。本会議が始まった。各自がファイナルフォーラムへの不安や、分科会内外で不満を抱え、意見の対立が多くなり、一時は分科会の雰囲気最悪だった。その後、大きく対立することはなくなったが、遠慮と妥協による議論が続いたように思う。英語能力を理由に、何もしない自分が歯痒かった。ファイナルフォーラムが終わった後、皆に笑顔が戻り、蟠りが消えた。本会議中に素直に話せなかったからなのか、分科会メンバーのことをもっと知りたいと今、思う。今後、分科会メンバーと時間をかけて相互理解を続け、関係を続けていきたい。

(荒木尊士)

最終日、RTメンバーとの別れが来たとき、どうしようもない寂しさとこのRTメンバ

一で良かったという達成感にも似た爽快感を強く感じた。多くの対立や気持ちのズレ、悩みや苦しみを共有し、笑ったことよりも仏頂面をしたことの方が多かったかもしれないが、それでも、終わってみれば全ていい思い出だ。本当にこの RT リーダーに恵まれて、メンバーに出会えて、嬉しい。ありがとうございます。RT 内で対立が起きたとき、RT リーダーは真っ先にどうしたら事態を改善出来るのだろうと忙しい中、必死で RT を盛り上げてくれた。そしてメンバー全員もどうにか良くしたい、歩み寄りたい、と藁にもすがる思いで RT タイムに臨んだ。今思えば、あの皆で必死になった時期が一番輝いていたと思う。

私の反省点は、自分のあまりの出来なさが悔しくて、結構泣いてしまったことである。本当なら泣いている暇など無かった。猛禽類のように食らいついて食欲に向上していく努力をしなければいけなかった。また、自分の顔にまで気がまわらず、他の人の士気を下げるような顔をしていたときが時々あった。本当に申し訳ないと思っている。JASC で得た反省点を今後の人生に生かしたい。

知識も浅く、あまり議論に貢献できなかったけれど、この分科会で「知りたいと努力することが大事」ということを学ばせてもらった。きらきらと輝く人達が集まった分科会、私にとって皆は、尊敬し眩しい存在であった。こんな幸運に恵まれて、言葉では伝えきれないくらい感謝している。

最後に、日本の農業を活性化するためには食料自給率を上げる必要があるという結論に至った分科会として、一言伝えたいです。ごはんを一食につきもう一口食べると

日本の食料自給率が1%向上するらしいですよ！皆さん、是非ごはんをもう一口食べて下さい！（上江洲仁美）

JASC に応募した当初、当分科会は希望外であった。決まった時は食や農業について何も知らないことに不安を感じ、RT リーダーが勧めてくれた本をとりあえず読んでみた。読んでいくうちに農業が直面する問題の重大さや、身近なはずなのに以外と知られてない事実を知り、興味が増していった。するとおもしろいことに新聞やテレビの農業関連のニュースに敏感になっていたり、自ら本を求めたりして、自分でも驚くほど積極的に行動していた。

RT として農業が直面している問題に対して何か斬新な提案をしたわけではないが、改めて農業の重要性を確かめられただけでも一歩前進なのではないかと思う。ファイナルフォーラムでも発表したけど、やはり農業の問題について何か行動を起こすにはまず初めに農業について考えなければならない。学生が集まって農業について真剣に議論する意味はそこにあると思う。各々この体験を活かし、友達に伝えたりして草の根から農業を変えることができるのではないだろうか。

活動中、政府関係者、民間企業や現場の農家から多様な意見をいただくことができ、関わってくださった全員の方に深く感謝します。分科会として成し遂げられたことは小さいかもしれないが、私の人生においてこれは非常に大きな出来事であった。今でなくともこの経験が活かされ、感謝の気持ちを社会に還元できるように努力したい。（木村優吾）

「グローバル化と食の安全保障」という分科会に決まった当初は、いったい何について、どのように議論していくのか見当がつかなかった。春合宿で分科会名から連想されるものをブレインストーミングしてみると次々に考えは出てきたが、その考え、更には各々の議論したいトピックはてんてきばらばらであった。そのような中、唯一気付いたことは、私達は無意識のうちに日本農業の視点に立って、グローバル社会における食・農業の問題を捉えているということであった。この視点はアメデリが議論に合流することで、変化していかざるをえないだろうと思っていたが、意外にもアメデリが日本農業に興味を抱いていたことにより、本会議中の議論もグローバル社会における日本農業という枠内で進んだ。人口増加による食糧不足や水問題等、よりグローバルな食・農業の問題が存在する中で、国内に特化した問題について議論することに関し懸念がなかった訳ではないが、もはやグローバル化の時代であるからこそ日本農業の問題・解決策といたしつつも、それらは他国にもあてはまるものであり、日本農業について議論することは世界を見ることにもつながるという結論を得た。

最後に、短い期間ではあったが、怒り、諦め、焦り、喜び、笑い、達成感等々多くの感情を共有した分科会の仲間に感謝の気持ちを伝えたい。本当にありがとう。そしてこれからもよろしく！（中澤彩）

■分科会総括

「食」という身近でありながらも距離を感じる特殊なトピックを扱うこととして発足したこの分科会。紆余曲折を経て、最終

的に TPP への日本参加という機会によって農業を今考える必要性を語り、日本の農業再生のための方法論について追及した。

「日本の農業をいかにして再生すべきか」という、分科会として提示した大きな問い。事前活動での議論とは少し異なる切り口から始まった本会議ではあったが、当初から日米双方のメンバーの興味が日本の農業に合致していたことだけでなく、ひたすらに現場に触れることを求め知識の吸収に注力した事前活動と、会議中の議論によって、農業という生業そのものに少しずつ惹かれていったメンバーの姿勢と彼らの願いを、この問い自体が表している様にも思う。

どこの壁を叩いても既存の議論をなぞらえているような感覚にストレスを覚えた時期もあったかもしれない。だが自らが農業に直接触れ、心を強く動かされ、考え、議論するプロセスを通してこそ、実際に動いているプロジェクトに潜む多くの議論や人の想いを少しずつ理解し、本当の意味で正面から問いについて考え、動き始めるという大きなきっかけを掴んだように思う。

そして、生産者や消費者という立場に立った具体策の提示を経て到達した、「直接触れて、学んで考えることから始めよう」という一つの大きな社会へのメッセージ。このメッセージこそが、清々しいまでの疲労感を共に経験した分科会そのものを体現しているかのように感じられ、最終発表を終え壇上を降りたメンバーの顔を見たときは、胸が一杯になった。

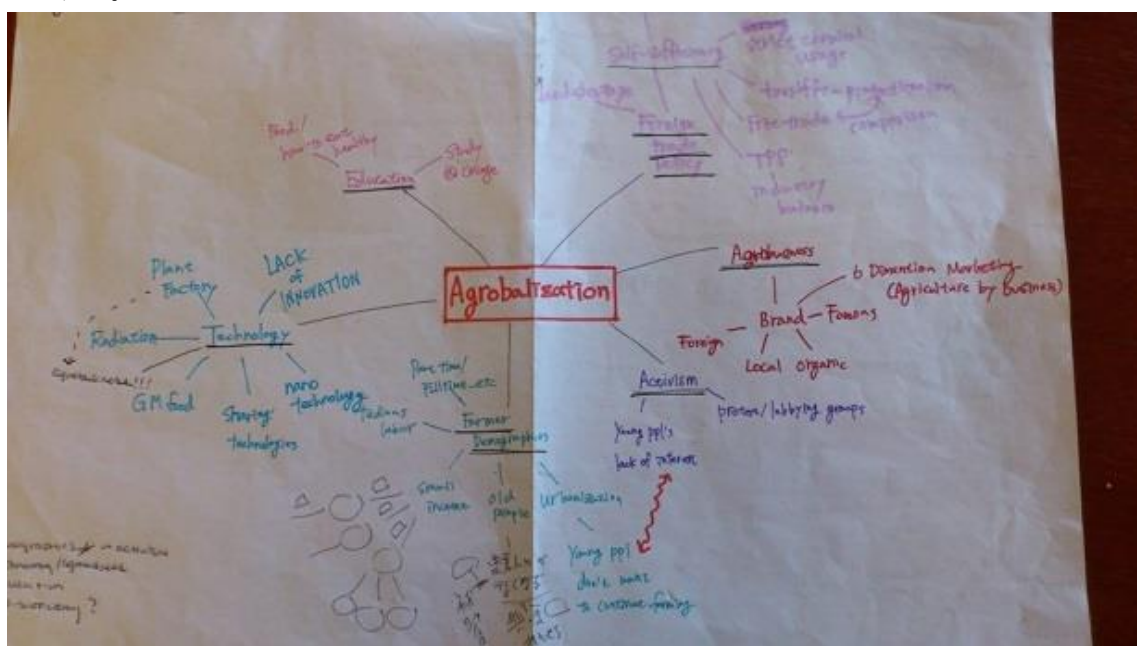
限られた時間の中で、分科会として何を徳たいか。一つのチームとして動くがゆえに個人個人の希望を充たすことは難しく、本会議中は辛い対立と妥協を繰り返した。

しかし、一人一人の、分科会での役割を必死で模索し続けそれを果たそうとする真摯な姿勢が国籍を越えて互いを強く励まし合っていたことをここに記しておきたい。RTリーダーという立場にいた私自身、正直、自分の知識・力不足を痛感し落ち込む毎日だったが、メンバーのその諦めない姿勢にいつも気持ちを奮い立たせられていた。そして、みんなの姿勢とその議論の傍にいられたことによって、何事も現場を理解し実行力の一助となるためには、まずは今、一生懸命勉強しなければならないということが自分の中で改めて現実味を帯びた強い実感となっている。

苦しさや失望、多くの感情を抱いた日々。それでも、最終日にアメリカ側がバスに乗り込む別れの際、みんなで何かを必死で引き止めるように集まり写真を撮った瞬間。何かと不器用な分科会だったけれど、あの瞬間が、ひと夏では終わらないこれからの分科会の絆を約束してくれているような気さえする。

最後に、この分科会を温かいご厚意で応援して下さい本当に多くの方々に心からの感謝を伝えたい。皆様のお力添えがあって初めて、現場に触れ声を聞かせて頂くという貴重な機会を沢山積み上げることが出来、そこから分科会として「食」に留まらない非常に多くのことを学べたと感じている。そして、RTに入ってくれて一緒に時間を過ごしてくれたメンバー全員と、一番喧嘩して一緒に泣いたRTパートナーのSoに、心からの尊敬と力いっぱいの感謝の念を送り、分科会統括とさせて頂きたい。

(横田真彩)



RTメンバーの興味を表すツリー

市民と政府の役割と責任

Social Responsibility of Governments and Citizens

■分科会メンバー

野口ゆかり*

大沼雄貴

川口真

古村大和

野口真央

Santiago Cruz*

Alice Liao

John McCallum

Norihito Naka

Ayaka Yoshida

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

リーマンショックや欧州債務危機により世界経済は停滞し、各国の財政収支は悪化し、政府債務が累積している。ギリシャやスペインなどのユーロ加盟国や日米両国において財政再建が急務となる中、政府はどのように増収を図り、歳出を抑制しながら適正なサービスを市民に提供すべきなのか。また、どのように官民で役割分担をし、効率的にサービスを展開すべきか。これに対して、市民はいかに受益と負担のバランスを図りながら、税金や社会保険料を負担し、年金、医療などの社会保障や公共サービスを享受すべきなのか。いずれにせよ、巨額の公的債務が累積する中、受益が負担を上回る状況を放置したままでは社会保障制度の崩壊も免れまい。これを回避するため、市民はさらなる負担増と給付水準の低下を受け入れられるのか。そして、政府はこのような痛みを伴う財政再建策を断行できる

のか。当分科会では、財政再建と経済成長を両立させるために市民と政府はどのような役割と責任を担うべきなのかを考察する。

■事前活動

春合宿

我々の市民と政府の役割と責任分科会ではまず、この非常に大きく様々な領域に関係するテーマについて各々がどのような意見や考えを持っているかを話し合った。その中でも政府、国民の概念自体を議論したことが、今後の分科会の方針決める大きな原動力になった。最初の民主主義国家アメリカと民主主義をアメリカによってインストールされた日本の政府の差異、両国の国民の政治参加の進度の差、政府のスケールや特徴に注目することが必要だと結論付けた。また安全保障、教育、財政などの様々な分野のケーススタディーを春合宿後の定期勉強会、フィールドトリップによって市

民と政府の役割と責任の理解と分析を進めていくことを事前学習の目標とした。この分科会最大のアドバンテージである複合領域を国民と国家の役割の視点から分析することは、他の分科会との意見交換、学習協力で高めていくことができれば良いと考えている。(大沼雄貴)

春合宿では、幅広い分野を扱うこの分科会でどのような議論を展開させていくべきなのかを話し合った。市民と政府の役割と責任を考えるにおいて複合的な幅広い視点を養う必要性をメンバーで合意し、様々なケーススタディーとそれに見合ったフィールドトリップを計画し始めた。私自身はつい自分の興味のある分野に偏りがちだったため、今まで意識的に勉強しなかった分野の知識の必要性を実感した。また、自分の興味範囲でさえ意見が固まっていなかったり、知識が欠如しているが故に抽象的な説明しかできず発言を躊躇してしまったりするなど自分の未熟さを痛感することが多かった。このような反省を活かして、勉強会やフィールドトリップを積極的に行い、本会議に向けた努力をしていきたいと思う。

(野口真央)



ディスカッションの様子



春合宿解散前に分科会メンバーで

定例ミーティング

私達の分科会では、二週間を一つのサイクルとして、担当の分科会メンバーが決めたテーマに即して課題及び議題を決めた。一週目は、担当者が出した課題に対するレスポンスを個人個人で完成させ、分科会の全員がそれを閲覧できるようにした。二週目では、全員が提出した課題を事前に各自が読み、全員の意見を把握した上で定例ミーティングを行った。

市民と政府の役割と責任はテーマが広く、方向性を定めるのに最初から苦労をしたが、幸いにもメンバーそれぞれの興味範囲が異なっていたため、限られた時間の中でも様々な分野の議題を取り上げることができ、多面的に問題を考えるきっかけとなった。

実際には、民主主義、憲法、貧困、そして安全保障という市民と政府の役割と責任を考えるにおいて極めて重要な4つのトピックを中心に定例ミーティングを行うことができた。また、早い段階から予定合わせを行っていたため、沖縄の自主研修やフィールドトリップの内容を定例ミーティングの内容を合わせるなど、計画的に進めることができた。(野口真央)

防衛大学校学生との議論

防衛大学校の生徒との議論を通じて感じたのは、最前線の熱意である。日本における国防の矛盾は解決しなければならない喫緊の課題である。そのことに対する問題意識が、一般の国民とは大きく異なった。危機管理意識が次世代の自衛官に養われており、日本国民として少し安心した。また、人間味の溢れる防衛大学校の生徒は親近感を覚えやすく、好印象であった。

「君達が日陰者である時の方が、国民や日本は幸せなのだ」昭和32年、当時首相の吉田茂が防衛大学校卒業生に送った言葉である。この言葉を噛み締め、肝に銘じている彼らは強い。「どうか、耐えてもらいたい」と吉田茂は続けた。防衛大学校の生徒は耐え、いざ有事の際に国民を守るための心構えを得ている。将来国の安全を委ねる人材との議論によって、日本という国家に希望が持てた。日本には頼もしい人材が育っている。それを実感できたことが何より、この話し合いの機会でも意義であった。

(古村大和)

防衛大生とのディスカッションは主に双方のプレゼンを発表することから始まった。ディスカッションでは教育や表現の自由について話し、自由に思うことを述べる形式で進んだ。「将来の自衛官」というイメージが先行していたが話していくうちに「同世代の大学生」であることが実感され、比較的和やかにディスカッションできた。ディスカッションのなかで印象に残っているのは自衛官が一般教育や思想を持つこの重要性についてで、防衛大生は自分たちも将来上からのいわれたことをそのままうけいれ

るのではなく自分できちんと考えまた海外の駐在武官とも対等につきあえるようにきちんと教育を受けることも必要だといっていた。このような人たちが将来国防を担ってくれると思うと頼もしく思うと共に自分は文民として違う形ではあるがしっかり社会に貢献していきたいとの思いを強くした。

(川口真)



防衛大学校の学生と分科会のメンバー

「僕らの一歩が日本を変える。」代表

青木大和氏 フィールドトリップ

日時：7月4日（木）

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス

「僕らの一歩が日本を変える。」という団体は以前から耳にしていた。しかし、それを運営している人物の名前がまさか自分と一致するとは思わなかった。青木大和さんは慶應義塾大学法学部政治学科の一年生である。しかし、一年間米国に留学していたため、年齢までも私と変わらなかった。そんな彼の活動や思考について尋ね、私の心は希望に満ち溢れた。彼は十代の政治的関心の向上を目指し、今後は特に教育の分野を中心に活動を続けるそうだ。私自身も公教育を通じて家庭の教育を見直すことを企

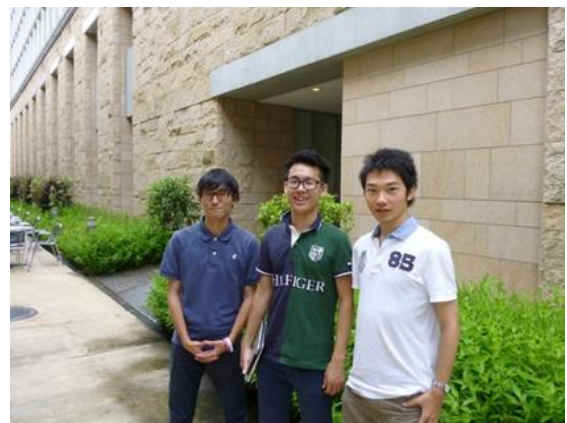
てている。同世代の同志の存在には、強く鼓舞された。悲観的になりがちな昨今、若い世代の中に危機感が生まれている。兎に角行動してみる若者が増えていることは大変喜ばしいことだ。「日本はもっと素晴らしい国になれる」そう信じ、自ら行動を起こした次世代の数だけ、日本の未来はよくなるはずだ。この機会は、今後の日本を変えたい自分にとって、非常に貴重な出会いであった。(古村大和)

僕たち、市民と政府の役割と責任分科会はこの人物にお話を伺った。目的は単純明快であった。「市民」の役割と責任を探ること。青木君の問題意識は若者の政治に対する問題意識の欠如にある。この問題に対して、青木君は高校生と国会議員を集めて議論し合う機会などをもうけるなど若者の政治関心をあげるため精力的に活動している。

印象的だったのは彼の理想を追求する姿だ。もちろん社会は思うように理想だけでは動かないかもしれない。しかし、自分のビジョンを自信をもって他人に伝えようとする彼の姿は説得的で情熱的にも思えた。これが「伝える」ことなのだと感心した。この「伝える」地道な作業が社会を少しずつ変えていくのかもしれない。実際、彼のすごいところは様々な人と対話して何らかの成果を出していることである。それが「高校生 100 人×国会議員」という企画として具体的な形にでている。もちろん彼はまだ僕たちと同世代で社会経験を十分には踏んでない。「若さ」というのはそれ自体強みでもあり、弱みでもある。どうやって大人が多くを占めているこの社会で多くの人を巻き込んでいけるのかがこれからの課題なの

かもしれない。彼はこの限界を認識した上で運動しているように思えた。頑張っしてほしいと思うとともに、まだビジョンも確立しておらず行動もおこせていない自分を悔しいと思い、いい意味で刺激的だった。

同世代の市民運動家から話を聞いたのは貴重だったと思う。内容も青木君が体験した政治家や高校生の実情などリアリティあふれる興味深い話もたくさん聞いた。青木君がモットーとしているのは「自分の周り半径 5 m から変えていく」こと。地道な運動が次第に伝播し、最終的にもっとよい社会を達成する。僕たちはここに「市民」の一つの姿をみた。協力してくださった青木君に感謝するとともに、ここで聞いた素材を積極的に議論に持ち込んでアメリカ人と豊かな議論にしていきたい。(川口真)



青木大和氏とフィールドトリップ参加者

社会活動家 湯浅誠氏 フィールドトリップ

日時：7月11日(木)

場所：東京都渋谷区のカフェ

湯浅誠さんは予想以上に若かった。今日までに培われた実績を事前に拝見し、勝手に年長者を想像していたのかもしれない。彼は市民と政府、両方の視点を持ち得る人

物としてお話を伺った。実際、市民団体として活動続け、民主党政権下では国政に携わり、バランス感覚の優れた方であった。市民団体は志を共有した人間同士で、理想の追求に奔走する。政府は全体の利益を理解し、包括的な政策決定が求められる。「この指止まれ形式」と「反対派の税金を使う」という差を湯浅さんは挙げていた。このことは、当分科会を理解する上で大変重要な違いであろう。彼は貧困という問題を解決するためには、関心が必要だと言った。それは高まっているのかと尋ねると、日米学生会議が訪ねてくることが何よりの証拠だと断言した。二十年という長い年月をかけて、少しずつ確実に関心を高め続けた結果が今である。それだけ社会を変えるためには、時間がかかるのかもしれない。

(古村大和)



湯浅誠氏とフィールドトリップ参加者

直前合宿

直前合宿は日本側参加者が本会議に向けて準備することができる最後の期間ということで、どの分科会も非常に熱の入った2日間だったように思う。特に私達、市民と政府の役割と責任分科会ではテーマが非常に抽象的で、定義することが難しいことも

あって、アメリカ側学生とどのように議論を進めていくか、準備期間の3ヶ月間に学んだ事、議論した内容について最終確認することに注力した。そして、直前合宿の最後に行った英語でのプレゼンテーションでは、準備期間にフィールドトリップで訪れた地方自治体、お会いした社会活動家の方々から学んだことを踏まえて、日本側参加者が考える理想的な政府、市民とは何か？といった問いに答える形式で発表をした。合宿最後のプレゼンテーションを通じて、日本側学生で政府と市民の責任と役割を結論づけることができたのは、準備期間として非常に有意義な時間が過ごせた結果だったように思う。(大沼雄貴)

■本会議中の活動

第一サイト：京都

長旅を終え、米国側の参加者が京都に到着した。凄まじい期待と緊張を胸に、日米の分科会メンバーが初めて顔を合わせた。市民と政府の役割と責任分科会はその汎用性が故に、議論が多岐に渡る。そのため、議題を明確に具体化し、話し合いをすすめることで合意した。しかし、上手に進まなかった。メンバー各々の興味分野が異なり、自然と論議は多種多様な題目へと飛び火した。その自由気ままな性格には、楽しいという感覚と同時に目標を見失う恐怖を覚えた。散らかる話し合いを如何に整理整頓するか、暗中模索する日々が続いた。そして徐々に、ゆっくりではあるが確実に、試行錯誤の末に議論する方法を見出していった。その藻掻く過程こそ、日米学生会議の掲げる「相互理解」なのかもしれない。相手の主張に耳を傾け、自己の発信も怠らない。

互いに真摯にぶつかり合うことで、初めて双方向の理解が可能となる。第一サイト京都ではそれを、自らの身を持って体験した。

(古村大和)

第二サイト：長崎

長崎サイトでは我々の分科会テーマである「市民と政府の責任とは何か？」という本質的なテーマについて議論し始めたことが大きな成果だったように思う。もちろんこの大きな問いに対して、このサイトで結論を出すことはできなかったが、各個人が持つ政府の責任や市民の役割を議論し、共有できたのはファイナルフォーラムに向けて大きな進歩になったと感じている。

そして長崎原爆資料館にアメリカ側学生と共に訪れ、原爆投下の正当性や政府が市民に対して負う安全保障とは何かについて議論できたことも分科会にとって有意義な経験になった。非常に印象的だったのが、日米両学生で原爆投下をしたアメリカ政府の判断を論理的、合理的に考えるだけではなく、実際に被爆した方の体験談を聞き、感情的な観点からも議論できたことだ。日米の学生が大きくデリケートな問題に向き合って、率直な意見交換ができたのは分科会、そして会議全体の理念である相互理解につながる大きな一歩だったように思う。

(大沼雄貴)



ディスカッション後の休憩の様子



ディスカッションの様子

第三サイト：岩手

第三サイトの岩手では、これまで議論してきたことをまとめながらファイナルフォーラムの発表内容を決定していく段階だったため、分科会としては一番悩みを抱えたサイトだった。発表内容、そして発表方法でさえ全員納得することができず、議論が迷走しているように感じられる時もあった。個人個人で分科会に求めていることが異なっていたため、異なるアイディアに妥協して納得することはみんなにとって難しかったのである。新しいアイディアが出されては却下、出されては却下の繰り返しだった。しかし、議論の難しさを痛感しながらも、誰一人諦めることなく夜も自由時間の間に集まって議論をした。このサイトでは個人単位でも打ち解けて仲良くなっていたこともあり、行き詰まった時は互いに励まし、話を聞き合うなどして、困難を乗り越えようとする姿勢がみんなの間で見られた。八方塞がりのように思えた時期もあったが、諦めずに団結しようとした結果、第四サイトに向けた分科会としての核を定めることが出来たように思う。(野口真央)

第四サイト：東京

最後の開催地である東京ではファイナルフォーラムへの準備が主となった。他のサイトと比べてファイナルフォーラムの成功という明確な目標のもとにまとまった議論をしたと思う。社会に何らかの影響を与えたいという意見で一致していた僕たちは、市民と政府の役割と責任分科会として自分たちがそれぞれの責任を果たすことが重要であり社会を少しでも良くするため自分たちと同じ若い世代の行動を惹起することが必要だと最終的に結論づけた。そのためにプレゼンテーションのためのスライド作りに勤しむとともに、前のサイトで作ることが決まっていたウェブサイト作りを本格的に行った。ファイナルフォーラムでは自分たちの議論の一部を紹介し、事前準備で伺った方の具体例を交えながら行動を起こすことの重要性を説いた。広大なテーマを扱ったこの分科会がメンバーそれぞれの価値観の違いを乗り越えてある程度まとまった形のプレゼンを提供できたことにほっとしている。(川口真)



プレゼンテーション準備の様子



ファイナルフォーラムの発表の様子

■分科会総括

「市民や政府は一体どうあるべきなのか？」現代社会は、リーマンショック以来景気が低迷し、各国の財政状況が芳しくない。政府は何にお金を使い、何を市民に任せたいのか、また市民は自分たちで何ができ、何を政府に求めているのか。経済格差・教育格差・医療格差・世代間格差など様々な問題が世界各国で勃発している今であるからこそ、政府も市民もこの問いの答えを今一度再考する必要がある。「今世界中で起きている様々な“旬なトピック”についてアツク語れる分科会を作りたい」という思いの下、昨年の夏にアメリカ側実行委員の **Santiago Cruz** と「市民と政府の役割と責任分科会」を立ち上げた。

長い選考過程を経て決定した分科会のメンバーにいよいよ会える春合宿の前日は、不安で仕方がなかった。実際に分科会のメンバーたちは市民と政府の役割と責任という幅の広いテーマに対してどこから手を付けたらいいのか少し戸惑っているように見えた。だが、苦戦しながらも分科会のメンバー1人1人が議論を前に進めようと真剣だった。

春合宿後の事前活動は、多くのフィールドトリップを企画し、定期勉強会で議論を

積み重ねることでテーマに対する理解を深めていった。また、好奇心旺盛なメンバーたちは積極的に他の分科会のフィールドトリップにも参加したり、本を読んだりして得た知識をどんどん分科会の議論に還元していき、チームとして良いスタートを切ることができた。しかし、本会議が始まり、アメリカ側と顔を合わせると、順風満帆のように見えた分科会は言語の違いやモチベーションの違いなどと多くの問題に直面した。問題は一筋縄で解決できるものではなく、本会議後半まで存在し続けたが、分科会のメンバー1人1人と話し合う機会を設けたことやメンバー個人の努力によって、最終的には分科会全体としてのチームを作れた。ファイナルフォーラムの発表を堂々となしていた分科会メンバーたちを客席から見たときは私も思わず満面の笑み

になってしまった。春合宿から始まった長い道のりを粘り強く、そして情熱を持ちながら参加してくれた分科会メンバーにここで感謝の意を表したいと思う。

この分科会活動を通じ何かを感じ、得ることができたのであれば分科会コーディネーターとしてそれ以上の幸せはない。しかし、これはあくまで通過点である。分科会で学んだことを今後の人生の成長に活かし、最終的には社会に対して何かしらの還元ができるようにしていってほしい。

末筆になりましたが、分科会活動の充実のためにフィールドトリップにご協力頂いた湯浅誠様、青木大和様、そして当分科会の活動にご指導いただきました皆様に心からの感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。本当にありがとうございました。（野口ゆかり）



分科会メンバー全員での一枚

現代における日米両国の教育問題

Modern Issues in Education

■分科会メンバー

川野さりあ*

伊藤孝真

大西由起

小松崎遥平

浜田りん

Cruz Arroyo*

Dylan Adelman

Jee Eun Choi

Miho Sakuma

James Kashima

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

教育とは単に知識の伝承だけではなく、人格の形成、個人の価値観の涵養に大きな影響を与える。学校、家庭、コミュニティ、職場など教育を受ける場は教育機関に限らず、社会全体にある。こうした様々な環境の中で人は自立し、成長すると同時に、教育の差が時には衝突を生むこともある。尖閣、竹島の領有権問題では、国家の歴史教育の差異が両国の関係に緊張をもたらす。同様に日米間でも原爆投下をめぐって、その評価や解釈の違いが論争を巻き起こす。このように教育は個人の世界観を築き、また世論形成に反映する。当分科会では、所得格差の世襲と教育格差、いじめ、教育現場の荒廃、教育委員会の役割など、日米両国が抱える現在の教育問題を取り上げる。そして学校現場のみならず、生涯にわた

って社会のあらゆる場で展開される多岐にわたる教育機能が、次代を担う人材育成と両国の発展にどのように貢献すべきかを考察する。

■事前活動

春合宿

春合宿では教育 RT のメンバーと、初対面とは思えない程、活発に意見交換することができた。真剣に自分の意見を受け止めてくれ、時には的確に反論してくれる仲間が、JASC にはいる。今まで自分の中で考え、完結してきたものが全てではないことに気付かされた。大学では、講義を受け、一人で調べ考え、レポートを完成させて終了することが多い。私は、そのような中で、完成したレポートに書いた自分の答えが全てなのだ、と錯覚していたと思う。たった3日間の春合宿であったが、本会議への期

待がより一層高まった、内容の濃い合宿であった。そして、これからの活動や本会議では、社会格差・歴史認識・意思決定に関する問題を教育でいかに解決するかについて深く議論しようという目標が定まった。

(浜田りん)

定例ミーティング

本会議前の事前活動として、2週間に1回のペースで分科会内の Skype ミーティングを行った。Skype ミーティングでは、その回の担当者が決めたテーマに沿ったディスカッションを行った。1つ目は、TOEFLの大学入試導入案と英語教育についてだ。実践する機会の不足、英語の勉強が目標>手段になっている現状、海外の外国語学習事情など、様々な視点からの意見が出された。2つ目は、学校が果たすべき役割についてだ。皆に一定の学力をつけさせるだけでなく、集団の中での自分を理解させる、といった大きな役割があることで一致した。さらに、教育格差の是正には社会格差の是正が欠かせない、格差は無くせないが、勝者が敗者に還元する仕組みを作ることが必要、学力測定の難しさ、家庭教育の役割といった話にも派生した。話のタネが尽きないテーマであった。3つ目は、教育に競争は必要か否か、ディベート形式で話し合った。順位がモチベーションに繋がるか、得意分野が伸ばせるのか、競争化は勉強本来の目的を見失わせないか等、意見が飛び交った。ディベートにより、自らの主張の弱点に気づいたり、反論を重ねながらより論理的な主張を組み立てたりすることが出来た。4つ目は、21世紀型能力の開発についてだ。自ら問題を発見し解決する力をどう

育てるか、スポーツの有用性、評価の難しさなどを話し合った。それぞれが興味ある分野を選び、メンバー全員が取り組んだことで、今まであまり触れることのなかったトピックについても、学び深めることが出来た。(浜田りん)

学校法人渋谷教育学園理事長

田村哲夫氏訪問

日時：6月8日（土）

場所：渋谷教育学園渋谷高等学校

「君達は自由になるために勉強をするのだ。」渋谷教育学園の理事長であり、渋谷、幕張中学高校の校長でもある田村哲夫氏が、校長講演にて述べた言葉だ。この言葉ほど、私達が勉強する意味を本質的に捉えた言葉はないと思う。そんな田村氏を訪問した今回の FT では主に、「グローバリズムと教育」についてのお話しが聞けた。その中でも田村氏が特に強調し、述べていたのは、今私達は劇的な変化を迎える状況に直面しているということだ。教育は文化、歴史的背景、その国の風土など、様々な要因によって形作られ、その目的も異なるが、今の激進的グローバリズムを受けて、日本の教育制度も変化の時を迎えている。「私達が生徒を教え育てることができるとは思っていない。しかし経験から、これからの時代はこうなっていくのではないか、という予測を伝えることはできる。そこでどう生きるか、悩み、判断するのは生徒自身だ。」田村氏は会をこう締めくくった。(伊藤孝真)



渋谷教育学園渋谷高校にて

田村哲夫氏（前列中央）、田村聡明氏（前列左）、高際伊都子氏（前列右）と

文部科学省 長谷川智氏 訪問

日時：7月24日（水）

場所：文部科学省

教育を考える上で、行政というアクターはとても大きな存在感を持っている。その行政が日本の教育をどのように導こうとしているのかということに、私たちは興味を持ち、文部科学省大臣官房総務課法令審議室の長谷川氏を訪ねた。まず私にとってある意味盲点であったのは、子どもの教育に第一義的な責任を負うのは家庭だという見解だった。教育問題といった時に、頭に浮かびやすいのは学校や教師であったからである。しかし、家庭というのはある意味最もプライベートな空間であるから、そこでの教育に行政が介入することは難しい。それでも教育の質は、何らかの形で維持・向上しなければならず、そのためにどのようなことがありうるかということを議論した。また、リーダーシップ・グローバル人材というものが何であるのか、民間と行政の教育における役割分担はどのようなものか、など、日米の教育問題を考える上で外すこ

とのできないトピックにも触れ、とても有意義な議論になった。（小松崎遥平）



文部科学省にて長谷川智氏と

防衛大学校研修

防衛大学校における教育分科会の議論は、自分達だけでは到底思いつくことができない視点を得られた場であった。防衛大学校と普通の大学の教育は全く異なる。防衛大生は公務員として給料をもらいながら学校に通い、私達は学生として授業料を払いながら学校に通う。そして教育も防衛大生の場合は、集団生活、厳しい訓練や上下関係を経て行われる。そんなまったく違った環境で、全く異なる教育を受けてきた防衛大生の視点は私達にとってとても新鮮であった。例えば、私達は教育の定義について、「個人の人格形成に係る全ての行為、教育しようとする意志の下に行われる行為」といった視点から議論するのに対し、防衛大生は「私達はただ感情を爆発させるだけの指導は教育とは呼びません。教育を行うには、相手のことを思いやる気持ち、愛情が必要です」と述べた。私達だけでは到底知れない視点から実りある議論ができた。

（伊藤孝真）



防衛大学校にて

直前合宿

直前合宿では、これまでの日本側の活動をまとめ、発表を行った。私たち日本側の教育 RT は、参加必須の研修以外でメンバー全員がミーティングに集まる機会がなく、直前合宿が防衛大研修以来の全員集合の場であった。初日は翌日の発表に向け、この3ヶ月間準備してきたことについてまとめ、議論も行った。全員集まれなかったからこそ、今までの情報を共有する良い機会となった。発表後の RT 活動としては、アメリカ側と合流する前に、本会議でのそれぞれの目標や思いを話し合った。興味深かったのが、女子は結果よりもプロセスの充実に重きを置いているのに対して、男子は何か形を残したいという思いがあったことである。それでも、全員に共通したことは「会議を楽しもう！」であった。本会議前に、有意義な時間を RT として過ごせたと感じている。(大西由起)

■本会議中の活動

第1サイト：京都

日米両国側の教育分科会初の顔合わせが行われた京都サイト。初めのぎこちない自己紹介から、今後の議論の進め方、ファイナルフォーラムではどのような発表がしたいか、というのが第一サイト「京都」での分科会活動での主な議題であった。特にこのサイトで決まったのは、ある議題に対して賛成反対にわかれディベートをするということ。そして現代の教育問題を解決する上で、その解決方法となる教育はどんなものなのか、それを考える手段として「私達の考える理想の学校（塾）構想」を進め、ファイナルフォーラムで発表する、ということであった。(伊藤孝真)



京都サイトバス停にて

第2サイト：長崎

第二サイトである長崎では、教育分科会としての議論が、今後の進め方といった表面的な議論から、「理想の学校構想」の具体的な内容へとシフトした。まず、理想の学校を考える上で話し合うべきトピックは何か、といった議論が行われ、その例として教える科目、方法、時間、生徒数等が話し合われた。この第二サイトから、緊張して

いた各々の雰囲気も和らぎ、議論がさらに活発になった。誰もが言いたいことを発言できているこの環境を大切にしたいと感じたのを覚えている。(伊藤孝真)

第3サイト：岩手

岩手サイトでの議論の中心は、学校の理念は何か、私たちの学校でどんな教科を教えるか、成績評価はどのようなべきかの3点であった。一点目について、ペーパーテスト偏重の教育からの脱却、貧富や人種などの、子にとっての先天的格差からの解放、国際的視座の涵養がメンバーの問題意識の反映としてあげられた。二点目について、学校ではあまり教わらない、差別、環境、最新の世界情勢といったものがあげられ、特に差別というトピックについてはどのように教育すべきかを、差別とマイノリティーの分科会と合同で議論した。三点目について、評価によって国家が優秀な人材をみつけやすくなるという利点から段階的な成績評価を支持する意見と、それは従来の学校で担保されているから、無為な優越的意識を生む成績評価はすべきでないとする意見とに分かれた。(小松崎遥平)

第4サイト：東京

東京に到着して最初のRTで、リフレクションを行った。理想の学校を作るというこれまでの議論に加えて、「現代における日米両国の教育問題」に含まれる別のポイントも議論すべきだという意見が全員に共有された。そこで、理想の学校に関するファイナルフォーラムでの発表の準備と並行して、他に、家庭教育、および、学校教育との関係について議論した。家庭教育が子の

教育に対して第一義的な義務を負っているという前提のもと、家庭教育の特殊性は何かという論点につき、就学よりもはやく始まる教育であること、異なる世代と接触できる場であること、家庭で教わる道徳は国家が運営する学校が干渉できない領域であることが挙げられた。(小松崎遥平)

ファイナルフォーラム

私たちのRTでは、それぞれが教育に対する問題意識を持ち、それに対しての考えがあった。日米合流後、最初に行われたRTペーパーのプレゼンテーション内容ごとに、そのトピックについて白熱した議論がなされた。これを踏まえて、私たちはそれぞれの問題を解決するような要素を入れた「理想的な学校」を考え、ファイナルフォーラムで発表することにした。

この「理想的な学校」は、小学校5・6年生を対象とし、土曜日の午後に授業を行う学校とする。そして、教育における3つのイシューを取り上げ、それぞれの解決策の頭文字と取り、“T.A.G. School”と名付けた(次頁図参照)。その3つの問題とは、

1. テストのための教育
2. 学力差／教育格差
3. 学校では教えられていない話題

である。

一つ目は、日米両国の授業展開が試験の対策に向けたものになりがちであることである。試験で高得点を取ることが高評価につながる。しかし、試験で良い点数を取るために勉強をすることは本来の教育の目的に反していると考えた。従って、T.A.G. Schoolではテストによる成績はつけず、レポートやクラスでの出来によってコメント

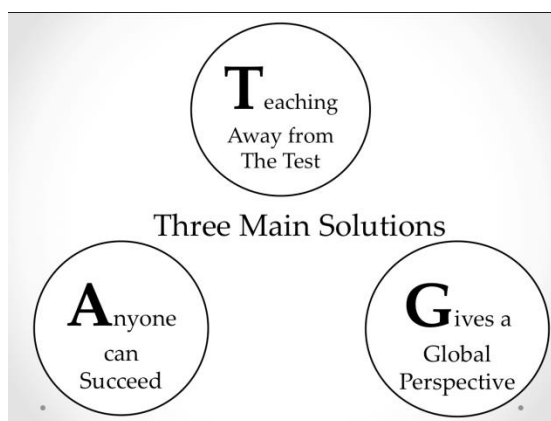
による評価をすることにした。

二つ目では、学力差は家庭の経済格差などにあると考えた。本校では、誰でも入学でき、学費も取らないことにした。ただし、学校を運営するために、寄付をお願いすることになっている。

最後は、学校教育では、国語や数学などの基礎学力が主となっている。しかし、グローバルな人材を育てるためには、広い視野を持たなければならない。私たちの学校では、例えば、宗教や環境、パブリックスピーキングなど、従来の学校にはない独自の科目を考案し、教えることとする。

以上が T.A.G. School の概要である。私たちは、好奇心旺盛で、モチベーションが高く、オープンマインドな生徒を育てたい。そして、この学校が日米両国が抱える教育問題の解決へのヒントとなればと期待する。

(大西由起)



■分科会感想

教育分科会が第一希望の分科会でなかったことから、JASC 参加当初、私は不安を抱いていた。自分に何ができるのか、自分は自分の貢献の形を見つけられるのかと。しかし、その不安は分科会活動が始まって

すぐに、なくなってしまった。経済学を専攻する私以外にも、法律、スポーツ、宗教学等、むしろ教育を専門としている人の方が少なく、そのバックグラウンドの違いが逆に意見、視点の違いとなって現れる、グループ全体としては良い結果が生まれていたように感じる。また、日ごとに深まっていく日本側参加者とアメリカ側参加者の関係は、必然的に私達が行っていた議論の深さに比例していたような気がする。議論を進めようと必死になることももちろん大事だが、それ以上に相互に信頼関係を築き、何でも言い合える環境を作ることも大切なのだと改めて気づかされた。今この5月から8月までの経験を振り返った時に思い返されることが、日米学校教育に関する知識でも教育と社会の関わりでもなく、メンバー全員の真剣に議論している表情であることが、私自身とても嬉しい。(伊藤孝真)

「教育」とは何か。私たちの分科会はこの疑問に常に向き合いながら、現代の教育問題について議論を進めた。日本側では、歴史認識の違い、社会格差、意思決定の3つのトピックに絞り、本会議に向けて準備を行った。自身の RT ペーパーでは、「日本文化と武道」についてレポートを書いた。こうして本会議までに各自で準備をしたものの、教育問題の範囲は広く、アメリカ側と着眼点や意見が大きく違ってくるのではないかと懸念された。しかし、いざ本会議が始まると、両国とも同じような問題を抱えていることがわかった。一方で、各自の RT ペーパーでは社会格差から宗教、リベラルアーツなど様々なトピックが挙げられた。切り口は違うが、全員に共通している思い

は、「教育をさらに良くしたい」というものではないかと感じた。自分たちのレポートをもとに、私たちは「理想的な学校」を考えることにした。議論は意見が対立することもあったが、お互いがそれぞれの意見を尊重し合っていたので、終始良い雰囲気でのディスカッションを進められたと思う。反省点としては、この「理想的な学校」に執着しすぎて、本質的な話が十分にできなかったことである。それでも、この RT 活動を通じて、教育について多方面から考えさせられた。そしてそれ以上に、最高の RT メンバーに恵まれ、チームとして一つの提案ができた。ただ、本会議が終わりではなく、これからも教育を良くするための活動を続けたい。(大西由起)

RT の中で強烈に感じたのは、アメリカ人は、自分の主張を論理的・説得的に伝えることに非常に長けているということだった。議論に戦いのような側面があると前提すれば、彼らの姿勢は、練度が高いとさえいえると感じた。彼らは、必ず、“I think ~, because…”、“Right, but~”、“I don’t think so because~”といったように、まず自分の立場を明確にしてから、その理由を提示する。発言にも淀みがない。また、最後に “Does it make sense?” と加えることで、聞き手へ向けて自己への批判の機会を与える。主張をするが、相手の意見もしっかり聞く。これがアメリカの教育か、と思った。いみじくも教育 RT で、交渉力、論理的な正確性、説得的な主張を育てるアメリカの議論ベースの教育の、何か圧倒的な力が、アメリカ側参加者の背後にあるのを感じた。また、具体的な教育問題の内容については、

成績評価や競争の是非についての議論が印象的だった。会議前は、私は国家（政府のみならず、経済力を持つ大企業なども含む）が効率的に優秀な人材を集めるためのシステムとして、評価と競争は必要だと感じていた。会議を終えた今でもその効果は部分的に認めているが、A や D といったランキング評価をせずともコメントによるフィードバックで、学生の習熟度を確かめさせることは可能であること、過度な競争は多くの脱落者も生むこと、成績評価はペーパーテスト偏重になりかねず、自分独自の意見を構築する能力を構築するのには向かないことなど、複合的な視点を手に入れることができた。(小松崎遥平)

私は、教育 RT に所属できて心から良かったと思っている。理由は、主に 2 つある。まず、何よりもメンバーに恵まれたからだ。ディスカッション中は、ジャパデリ・アメデリ問わず皆が積極的に発言していた。新しいアイデアを次々に提案する者、議論の方向性をはっきりさせる者、それぞれにうまく役割を果たしていて、とても良い雰囲気の中で議論を進めることができた。そんなしっかり者メンバーに囲まれて、私は彼らに頼りすぎてしまったように思う。もう少し自分にできることがあったのではないかと、と少し悔しさも残っている。そして、もう一つの理由は、「教育」という大きなテーマにきちんと向き合えたからだ。教育は、現状維持に妥協しがちな問題であり、変えたからといってすぐに結果が出るものでもない。私自身、今の教育にはいろいろと問題があることを知りながら、なんとなくスルーしがちだった。そんな教育について、

時間をかけてみんなで考えることができ、非常に有意義な時間であった。成績、家庭教育、教育格差…。一つのトピックが、また別のトピックを引っ張り出し、話は尽きなかった。さらに、今まで何の疑問も持たなかった、自分が受けてきた教育を見直すきっかけにもなった。教育 RT としての活動は終わったが、引き続き教育に関心を持って学んでいきたい。(浜田りん)



ファイナルフォーラムにて

■分科会総括

第 64 回会議に参加した際、様々なバックグラウンドを持つ学生たちによって展開される激しい議論が面白くて仕方がなかった。と、同時にどうしてこれほどに人によって物事に対する考え方が違うのだろうかという素朴な疑問が浮かび上がった。その背景にあるのはそれぞれの家庭での教育、宗教や文化、学校教育、メディアなどである。私たちの周りで繰り返される様々な形態の教育によって、人の世界観や人格は形成されていく。

教育は誰しものが何らかの形によって必ず受けるという意味では非常に身近な問題であるが、身近過ぎる故にその問題について真剣に向き合うことはあまりない

のではないかと。これを期に自分たちが受けてきた教育を振り返り、更にはこの 21 世紀に求められる教育とは何かを考えるべきではないだろうか。そう思って Cruz とこの分科会を作ろうと決めた。

日本側参加者のみで進めた事前活動では、日本の英語教育、教育現場での競争の必要性などのトピックについて自分たちのこれまでの経験も踏まえて意見交換をした。加えて、フィールドトリップにて渋谷教育学園理事長の田村哲夫氏、文部科学省の長谷川智氏にお話を伺うことにより、それまでの経験談中心になりがちな議論から、同じトピックに対してまた違ったアプローチをするきっかけとなった。本会議においては「理想の学校」というテーマの下、今日必要と思われる教育科目や、最も効果的な評価法などについて、日米両国の教育制度の特徴とその長所短所について触れながら議論を進めていった。

春合宿から続いた教育に関する議論を通じて気付いたのは、分科会のメンバーはもちろんのこと、分科会を超えて会議参加者全員が教育に関心を持っているということだ。つまり、それだけ人の生涯において教育の役目はあまりにも大きく、その影響は実に多岐にわたることである。今まさに大学・大学院で教育を受け、いよいよ社会へ羽ばたこうとしている私たちは教育を受容する側として批判も含め様々な意見を持っている。今だから感じるこの思いを、楽しさの中でもいくつもの壁に直面したこの夏の議論を、いつも頭の片隅におきながらそれらを必ずや次世代の教育に活かせるようにして

いきたい。

最後になりますが、分科会フィールドトリップを快く受け入れて下さいました田村哲夫氏、田村聡明氏、高際伊都子氏、長谷川智氏を始めとし、分科会活動にご協力頂きました多くの皆様に深く感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。

(川野さりあ)



環境問題と社会

Environment and Society

■分科会メンバー

森田修弘*

小林薫子

白畑春来

鈴木健司

Madison Mears*

Daniel Bateyko

Karim Boyd

Yuki Numata

Ryota Sekine

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

今日私たちの社会では環境問題が以前にも増してクローズアップされている。地球温暖化への世界的な取り組みの第一歩であった京都議定書が結ばれて早くも 15 年が過ぎ、国内では様々な地域や企業が主体的に環境保護活動を展開している。個人レベルでも自転車通勤やパークアンドライドなどが関心を集めている。また、原子力発電所や石油流出の事故が報道される中、地球にやさしい新エネルギーへの期待が高まっている。世界に目を向けると、動植物の絶滅を危惧したワシントン条約や資源としての水の重要性が注目され、各国の利害が錯綜する多国間の交渉が行われている。資源の枯渇や汚染、公害、環境破壊など様々な問題の対策を考える上で、世界経済を牽引する日米両国が鍵を握るのは間違いない。当分科会では、環境

問題における企業や政府、個々人の果たすべき役割と課題を考察し、自然との共生社会を構築するための方策を模索していく。

■事前活動

定例ミーティング

ミーティングの時間帯は、それぞれのメンバーと相談の上、週 1 回水曜日に Google Hangout で行うように決定した。ミーティング当初は、各々の環境問題への知識が不足しているとの理由より、それぞれが興味のある環境分野についてリサーチし、そこで得た知識を毎週他のメンバーと共有するという形をとった。後半は、知識量は増えてきているが、その知識をアウトプットする機会が少ないという理由より、毎週一人が議題を決めて、それについてミーティングで議論するという形をとった。それと同時に新しい知識の共有もできる限り行った。また、アメデリとの合流後、円滑に議論を進めるためにアメデリの RT ペーパーを事

前に読み、互いにその内容も共有しあった。毎週ミーティングを行うのは、全員のスケジュールを合わせるのが困難であった一方で、毎週 RT 内でコミュニケーションを取れたことは本会議への準備としても非常に良かったように思う。(鈴木健司)

日本エネルギー経済研究所訪問

日時：6月11日（火）

場所：日本エネルギー経済研究所

この研究所は、「世界の中で、日本とアジアのエネルギー・環境を考え、発信する」というミッションのもとで研究活動をしているシンクタンクである。当日対応して下さった方は若手の研究員の方3名であり、うち1名は JASC の OB の方であった。RT として初めての FT であり、私たちは少し緊張気味であったが、研究員の方が終始フランクに話しやすい雰囲気をつくって下さり、主に中東の石油情勢や日本の原子力事情をお伺いすることができた。FT 後は近くに食事に連れて行っていただき、そこではご自身の経験や研究活動の本音などのお話をして下さった。研究員の方はどなたも親切で、学生の視点に立って下さり、また自分の研究に誇りを持ちつつも研究を楽しんでいるように見受けられた。RT としてエネルギー問題は重要な環境問題と捉えており、外交や国際情勢、経済といった多角的な観点からエネルギー問題を考えられるよいきっかけとなった。(白畑春来)



日本エネルギー経済研究所の皆様と

東燃ゼネラル株式会社訪問

日時：7月2日（火）

場所：東燃ゼネラル株式会社本社

日本の石油大手である東燃ゼネラル株式会社に訪問をした。昨今福島での原発事故によって改めて注目されるようになった火力発電、その現状や日本のエネルギー事情について中央研究所所長の西村様と研究員で工学博士の古関様にお話を伺った。石油枯渇の話がクローズアップされる中、石油関係者の視点からお話を伺えたのは非常に興味深く、またシェールガス革命やエネルギーミックスの話を中心に世界と日本のエネルギーの歴史と展望を学んだことで、より一層原発事故の与えた影響の大きさ、そしてエネルギー資源確保の重要性を学ぶことができた。(森田修弘)



東燃ゼネラル株式会社の皆様と

日本政策投資銀行訪問

日時：7月4日（木）

場所：日本政策投資銀行本社

環境RTのFTの一環として今回は日本政策投資銀行を訪問させて頂いた。基本的には、今回FTの対応をして頂いた環境・CSR部調査役の野澤様にお話をして頂き、そこで質問があればこちらから質問させて頂き、お話の最後にも質問の時間を設けて頂いた。お話の内容は、日本政策銀行とはという基本的な所から融資の際の基準などの細かい所まで話して頂き、とても丁寧な印象を受けた。質問にもとても丁寧に答えて頂き、FT参加者の疑問を解決することができたように感じる。日本政策銀行について具体的に知ることができ、RTでの活動にはもちろん、個人的にも業務内容を知れ、とても有意義なFTになったように思う。日本政策投資銀行についてお話を聞いたことは、環境RT外の参加者にとっても有意義だった様子で、RTを越え全参加者にとって有益なFTだった。今回このような貴重な機会が得られたのも、日米学生会議ならではの素晴らしい経験だった。（鈴木健司）

直前合宿

直前合宿では、春合宿から本会議までのそれぞれの分科会の活動を報告するプレゼンテーションを日本人参加者に向けて英語で行った。英語での正式なプレゼンテーションでは第一に言葉を的確に選ぶ、第二にPCなどを使った演出、第三に英語のプレゼンテーションに慣れることを経験した。私達は、プレゼンテーションで、如何に一般の学生に環境問題について関心を持ってもらうかについて発表をした。しかし、参加

者からは政府の関わり方についてなどの質問があり自分たちの視野に入っていなかった問題を提示された。本会議の前に英語のプレゼンテーションを練習できたこと、視野に入っていなかった問題を指摘されたことなど本会議の準備に大変有意義な直前合宿となった。また、直前合宿を通して分科会としての今後の課題や新たな目標も見つけることができた。そして、本会議に向けて分科会メンバーとの結束も深まり、信頼関係が強くなったと感ずることができた。

（小林薫子）



直前合宿で最後の確認

事前活動総括

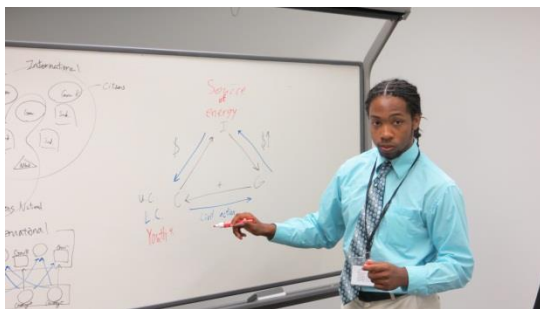
春合宿で環境問題へのイメージを話し合う中で、環境と経済という、相反する関係のバランスをどうとるかという大きな問題に気づき、その後、その問題を考えるきっかけとなりうるFTを行った。毎週ミーティングにむけてメンバーがしっかり自分で本を読み進めたり、リサーチをしたりしたおかげで、広範囲な環境問題について万篇なく知識を得ることができた。ディスカッションよりは知識共有の方に重点を置いていたが、本会議においてその知識をどのように活用していくかを決めることができた。始めの頃はお互いシャイな部分もあり、議論においてコーディネーターののぶに助け舟をだしてもらうことが多かったが、次第

にデリだけでも順調に進めていくことができた。そんな中、本会議の直前になってメンバーが一人抜けてしまうという大きな変化が起きてしまい、他の分科会に比べて人数が少ない中で今後の活動について多少不安を感じながら、本会議を迎えることとなった。(白畑春来)

■本会議中の活動

第1サイト：京都

第1サイトであるということもあり、一番の大きな出来事はやはりアメデリとの合流であったように感じる。それまでにアメデリとのミーティングを行っていなかったため、実際に声を聞くのも初めてという状態だった。最初はやはり、RTメンバー全員が緊張していたように思う。それでも、自己紹介から始まり、それまでに各々が学んできたことの共有、日本側の事前勉強段階での意見を共有し、徐々に仲は深まっていた。また、京都サイトでは、総合地球環境学研究所を訪問し、環境問題に関する講演を聞いたことで、RT内でも活発な議論ができたように思う。そこで、ファイナルフォーラムでのRTの発表の基本となる意見の形成にも繋がった。それでも、議論をしていく上では、それぞれが遠慮しているようで、様子を見ながら行われていたように思う。(鈴木健司)



考えを図式化する Karim

第2サイト：長崎

長崎ではハウステンボスを訪れ環境への取り組みを見学した。中でも自家発電の取り組みは印象的であった。災害大国である日本で、施設がそれぞれ自家発電の体制を整えるのは社会の安全のためにも必要だ。ハウステンボスのように私企業による積極的な環境問題への取り組みが日本でも今後増えてほしい。次に、私達は長崎原爆平和記念式典に参列した。人類唯一の被爆国である日本の国民として原爆の悲惨さを学び、二度と起こしてはならないものとして発信する義務があると感じた。資料館で見た当時の写真は衝撃的だった。東日本大震災により起きた福島原子力発電所の事故を経て、原爆の悲惨さを考える時平和利用の名の下に推進された原子力発電所の安全性についても考えざるをえない。講演会で被爆者の方がおっしゃいたように、原子力の軍事利用だけではなく、平和利用についてももう一度考え直すべきなのではないだろうかという意見に共感した。(小林薫子)

第3サイト：岩手

最終プレゼンで伝えたいことが明確化されたため、実際に具体的に内容をつめていく作業をした。まずは現役の大学生であるJASCersに向けた環境意識のアンケートを実施・分析し、そのアンケート結果の活用方法を念頭に、プレゼンの構造や提示すべき問題とその解決策のアイデアをいくつも考えては議論した。議論の内容が具体性を帯びてきたことで、各個人の持っている意見が出やすくなり、議論は活発になったが逆にアイデアがまとまらず、また会議も中盤を越えてきたところで日々の疲れもたま

っており、ミーティング中は単に意見のぶつけ合いとなり雰囲気が和やかでない時もあった。各々がそのような雰囲気を改善したいという思いを抱いていたため、最終日のリフレクション後に思い切って一人ひとりの RT への思いや今後何をしたいかをぶつけ合い、またアイスブレーキングのようなフランクな話をしたことで、より一層仲を深めることができ、会議終盤にむけて結束力を高められた。(白畑春来)

第4サイト：東京

最終サイトである東京では、それまでの議論に加え、ファイナルフォーラムでの発表の構成について話し合った。それまでの各々の意見をまとめ、RT として一つの意見にするのは簡単な作業ではなかった。全員が納得いくようなものにまとめるのに時間を多く費やした。それぞれの意見を集め、話し合いどういった発表にするかを議論し続けた。発表の準備はファイナルフォーラム直前まで続いた。全員の協力のおかげで、直前で形にすることができた。それまで多くのことを経験した他のメンバーと共に、ファイナルフォーラムという場所でそれまでの集大成としての発表を終えた時には、言葉では言い表せないものがあった。それと共に、65th JASC の終わりを意識し始めるようになった。それまで多くの時間を共に過ごした他のメンバーと過ごせる時間が残りわずかであることを認識させられた。それでも、このメンバーで会議をやり抜けたことを誇らしく思う。(鈴木健司)

ファイナルフォーラム

15 分という短い時間で私達の分科会が

今まで話し合ってきたことをまとめるのはとても難しかった。最終サイトである東京に入り、分科会のなかでも議論が白熱した。プレゼンテーションを最大の目標とする人達と、そこに重点をおかず分科会でのディスカッションに重点を置きたい人達とで分かれた。だが、みんなファイナルフォーラムを成功させたいという共通した思いをもっており、議論を重ねた上で最終的にはみんなが納得できるようなプレゼンテーションを作る事が出来た。また、ファイナルフォーラムを成功させる上で仲間の大切さを改めて感じさせられた。米国側の参加者が自分の書いた英語の原稿をすべてチェックし、添削してくれた。また、正しい発音も丁寧に教えてくれた。参加者の中で国境を越えて、みんなで一つとなってファイナルフォーラムを迎えることが出来た。発表が終わった後は達成感を感じたが、同時に終わってしまった寂しさをひしひしと感じた。

(小林薫子)



■分科会感想

春合宿から本会議まであっという間だったが充実した日々を過ごせた。この会議が始まる前までは、環境問題についての知識がほとんどなかった。そのため、春合宿が始まる前までは楽しみと同時に不安な気持

ちもあった。だが、春合宿の分科会の会議で、自分達が環境問題のなかで特に興味のある分野を絞り込み、今後の目標が明らかになったので、話していく中で不安はなくなっていた。また、FT 先では普段なかなかお会いすることが出来ない方々のお話を伺うことができ、自分の視野も広がった。今回の日米学生会議を通して、環境問題のなかでも特に今、私達学生が何を出来るかを話しあう大切さを学んだ。社会問題を解決するためにはまずその問題についてよく知ることである。毎週行った会議を通して、環境問題に関する本を読み、分科会の他のメンバーと意見を交換することによって、複眼的な視点で問題を捉えることが出来たので有意義だった。本会議に入り、米国側の参加者が加わったことにより、物の見方が多元化した。例えば、米国側の参加者は日本のリサイクルへの取り組みについて驚いていた。日本は資源が少なく、国土も狭いのでリサイクルはかせない。このように環境問題をとっても、国際レベルにおいて各国の事情により問題意識や課題は様々であるということを実感した。意見の相違もあったが、日米学生会議を通して意見の相違や文化の相違があっても、成果を生み出すことが出来るということ学んだ。

(小林薫子)

自分の伝えたいことが英語でうまく伝えられず、何度も議論の流れを止めたのに私の意見に耳を傾けてくれ、異論や反論を忌憚なくぶつけてくれたメンバーからは、多くのことを教わり、刺激を得た。まず、一人ひとりが様々な能力に長けていた。例えば MTG 中に目先の議論に囚われずに、し

ておくべきリサーチや方向性の整理など、何が必要なのかを先に読み取って実行してくれたり、議論が進まず RT 全体の雰囲気が落ち込んでしまっている時は気を利かせてそれとなく盛り上げてくれたりした。時々、個人ワークが多くなってしまいうまく意思疎通がいかなくなったり、プレゼンにむけただけの議論が多くなってしまい、環境問題に対するディスカッションできなくなったりして、お互いの心の内が見えずに少なからず距離を感じてしまう時もあった。そのような違和感があった中、岩手サイト最終日のリフレクションの後にミーティングをひらき、今後話し合いたいことや、自らの本会議での目標を再確認しあい、また第3サイトにて初めてアイスブレイキングをすることで一段と仲を深められた。第4サイトに入ってから、時間がないという焦りもあってメンバーのやる気が全開になり、各々の得意なことをプレゼンの内容に活かしながら和気あいあいと議論を進められた。そのおかげで、プレゼン中はとても楽しめたし、私たちが伝えたかった思いが聴衆に伝わったように感じ、やりきったというすがすがしい思いを感じることができた。(白畑春来)

これまでの RT 活動を通して、最初に思うのはこのメンバーで活動することができて非常に嬉しいということである。RT 活動を通して本当に多くのことを経験することができた。事前勉強の段階では同じ日本国内でも住む場所の離れたメンバーと毎週ミーティングを行い、本会議が始まれば今まで話したことのなかったアメリと議論を進めていくのは、決して簡単ではなかった。

楽しいことばかりではなく、悩むことも多くあった。多様なバックグラウンドを持つメンバー達とチームとしてやっていくことの難しさを知り、どうすれば良いのか分からなくなることもあった。それでも、互いに協力し合い進んでいくことで、チームとして活動する素晴らしさも知った。そして、様々な葛藤を通して、最終的に RT として本会議をやり抜けたことを誇りに思う。自分たちが最終的に行ったファイナルフォーラムでの発表が、どれほど社会に還元されたのかはわからない。それでも、この RT 活動を通して得た経験はかけがえのないものになったと思う。この RT で得た経験をこれからどのように活かしていくかが大切だろう。他のメンバーとの関わりをこれからも大切に、この RT で得たことを胸に、これからも頑張っていきたい。(鈴木健司)

■分科会総括

環境問題は誰にとっても身近なトピックである分、具体性を伴うように強い意識を保たなければ表面的で薄い議論に終始してしまう可能性が常にあった。そこで、分科会のテーマを「環境問題と社会」にし、環境問題に対して、政府・企業・市民の3つのアクターがどのような責任を持ち、その改善にどのような取り組みをするかという点に注目をして分科会活動を始めた。春合宿では、各メンバーが興味を持っている環境問題、そして何故その問題に興味を持つようになったのかを共有し、それぞれの問題に対して実際に社会でどのような取り組みが行われているのかを調べた。その結果、「環境問題」と「経済」には強い関連性があるという点に着目をし、その後の活

動の軸とした。本会議前の FT では JASC の OB や賛助企業の協力の下、日本を取り囲むエネルギー情勢や企業を環境問題対策に取り組ませるための銀行融資などについて学ぶことができた。本会議では、アメリカ側の学生とともに各サイトで研究所や再生可能エネルギーを利用している企業などを訪問し、現場を通して現状を学びつつ、市民や企業を動かすために大学生が取ることのできる行動は何か、そしてその学生を動かすインセンティブは何があるかという点を議論することとした。

当初はコーディネーターに指示を仰ぎながら議論を進めていたデリ達も本会議を半分も過ぎた辺りから、自分達で議論の方向性を決め、自主的に様々な取り組みを行うようになっていった。その一つが他の参加者達へのアンケート調査である。日頃学生がどの程度環境問題に興味を持っているか、どの程度の対策を取っているか、何が彼らを動かすインセンティブとなっているか等のデータを集め、実際に学生を動かすためには何が必要なのかを分析した。各メンバーが主体性を持って取り組み始めたことで議論はより活性化し、最後のファイナルフォーラムの発表では出会ったころとは見間違えるような自信に溢れた姿を見せてくれた。

すべてのメンバーがそれぞれの苦勞を抱えつつ、ときには涙を流しながらも決して挫けることなく前を見据え、グループの中での自分の役割を見つけていったことで1ヶ月という短い期間の間に大きく成長したように思える。そんな彼らと共に活動できたことは誇らしく、彼らのその強さを称賛したいと思う。

最後にこの分科会を支援してくださった
皆様に改めて感謝の意を表します。有難う
ございました。(森田修弘)



マイノリティと差別

Social Minority and Discrimination

■分科会メンバー

市毛裕史*

兼子莉李那

大野峻典

大日方望

橋本萌

Katherine Jordan*

Feruz Azimova

Pramodh Ganapathy

Sora Choi

Sharon Lu

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

グローバル化が進み、国境を越えた人の移動が世界各地で活性化している。そうした中、基本的人権や市民権が十分に保障されていない社会的弱者が多く出現し、新たな差別、人権侵害などが生じている。多民族国家アメリカでは、アフリカンアメリカンへの人種差別や移民の貧困問題が社会に根強く残り、近年新たに同性愛者の権利問題も表面化している。日本においても在日コリアン、アイヌ民族や部落出身者などのマイノリティに対する不平等や差別が存在している。また今後日本の人口が減少し、外国人労働者が増加していく中で、外国人移住者に対する社会的差別や法的地位の問題は重要性が増すであろう。このように様々な形で社会的弱者への差別が取りざたされる中、どのように人権を平等に保障していくべきなのか。当分科会では、人種、

民族、ジェンダーなど差別や偏見の対象となっているマイノリティが平等、公正に生存できる社会をどのように構築していくべきか、その方途を模索していく。

■事前活動

春合宿

春合宿では、日本側参加者が初めて顔を合わせるということもあり、最初の分科会活動では己紹介から始まり、分科会テーマにおいて参加者一人ひとりの興味のあるトピックを共有した。春合宿中の分科会活動では、主に「マイノリティ」と「差別」という言葉自体に焦点を当て、其々の言葉の定義を模索し、「何故差別は起こるのか」「何故差別はいけないのか」等、今後の分科会活動の基盤となる議論を行った。また、各自のテーマに合わせ、フィールドトリップの候補地、今後の議論の進め方などにつ

いても話し合った。

春合宿では、参加者はお互いに初対面であったにも関わらず、率直に其々の意見をぶつけ合い、普段の大学の授業等で行うグループ討論とは全く違う、真剣な議論が出来たと感じている。マイノリティーと差別という日常的には扱いにくいテーマであることから、言葉の定義を考えるだけでも様々な議論が展開され、今後の活動に期待の持てるスタートとなった。(兼子莉李那)

RT レポートおよび勉強会テーマ

マイノリティーと差別分科会では、朝勉強会という幅広く知識を身につける Skype ミーティングの他、一人一つ自分の興味分野を決め、合宿以降の3ヶ月でレポートを書いた。また、レポートの内容に基づく勉強会を各自に企画してもらった。そして、座学に留まらず実際に有識者の方にお話を伺ったり、施設を見学したり、自分自身の目で学ぶことも取り入れる事で、「マイノリティーと差別」について自分の意見の軸を作り、各自が本会議において確固とした知識に基づく自分の主張をできるようになることを目指した。

【兼子莉李那】

私は自身の分科会テーマとして、「差別の構造」を設定した。その理由は、障害者である自身の差別体験等から、差別の基礎知識を深め、その視点から様々な差別問題を研究していきたい、と感じたからである。以上のテーマを踏まえ、RT ペーパーでは、

差別とは何か、何故差別は起こるのか、差別と区別の違い等に焦点を当てた。他の日本側分科会メンバー三名は其々部落差別、人種差別、性的差別等、特定のテーマに焦点を当てていたが、私のテーマはマイノリティーと差別そのものを考える上の基礎となるものであり、勉強会においては、私の差別体験の一部を実例として共有し、私が指示する差別の定義等を示した。差別のとらえ方は人によって異なるが、最低限言えることは、差別は誰かを傷つける攻撃であるということであり、その視点から様々な差別を見ると、其々の差別の共通点が見え、差別問題の奥深さと難しさを改めて感じ、今後も研究を続けたいと感じている。

【大野峻典】

「マイノリティーと差別」の中で、私は特に性に関する差別を取り上げた。社会に残るジェンダー差別(いわゆる男女差別)、LGBT の性的マイノリティーに関する問題である。勉強会で特に議論したのは、社会におけるジェンダー差別に関してであった。日本では未だに職場に男女差別が残っている。育児休暇を取るのがほぼ全てが女性であったり、一度職場を離れると出世競争に勝てなかったり、つまりは実質的に育児休暇を取りにくい風土が残っている。代表例として考えられるのは、専業主婦という存在である。次世代を育てるコストが女性の側にかかり、専業主婦というかたちが生じた。しかし、少子化が進み労働力不足が叫ばれる中、いかに女性を活用するかをかん

がえなければならない。そのためには女性の側にのみ、次世代を育てるコストを見積もるような差別的な見方ではいけないのだ。社会が男性女性に均等にそのコストを期待する世の中になって初めて、男女ともに働きやすい社会、労働力を最大限活用できる社会になる。日本がそのような社会を実現するためにはどのような事をしたらいいのか議論した、先進的なロールモデルになる福祉国家を探そうとなった。

【大日方望】

マイノリティーと差別分科会のメンバーとして自分が取り組んだのが、現代の日本社会における部落差別についてだった。予備の知識もなく、見えない差別でもあるこの問題に取り組もうと思ったのは、単一的、といった表現がなされる日本社会をより立体的に見ることができるのではないかと、という考えからだった。実際勉強してみて、これが複雑かつ膨大な広がりをもっていることに気がつかされ、おじけづく部分はあったが、同時に普段の自分の身の回りの生活で所与のものとしてきたものが問いなおされる体験をした。食肉市場と皮革産業の現場に実際に足を運び、自分の五感で感じ取り、確かめたことは、自分の普段の生活に密接に関わっていても、不可視な領域が社会には存在するという事だだった。それらの体験を通して、社会に内在する、自己に内在する価値を直視せざるを得ず、難解の一言に尽きるように思った。矛盾の存在についての認識と自覚。自分にもたらされ

たものは予想以上に重たく、しかし大切なものだと感じる。

【橋本萌】

マイノリティーと差別の分科会に入ったときから自分はアメリカの人種差別というテーマで勉強を進めていこうと決めていた。RT paperでは先住インディアン、アフリカンアメリカン、そしてヒスパニック系の3つの人種に対する差別の歴史と現状を取り扱った。しかしやはりテーマがあまりにも大きくカバーしきれないと思い、その後は一番自分の中で興味のあるアフリカンアメリカンに対する差別に焦点を絞り、自分の勉強会もこのテーマで開かせてもらった。具体的にはアフリカンアメリカン差別の歴史を時代ごとに追ひ、今日のアメリカの現状に繋げるという内容にした。やはり歴史的事実を知らなければ現状についての議論をすることは難しいと考えたが故に歴史を中心に勉強したのだが、自分の中でも知識になった上に、本会議での議論においてもその知識を応用して他の事例と関連付けられた点で非常に良かったと思っている。



早稲田大学にて

防衛大学生とのディスカッション

防衛大研修においては様々なコンテンツがあっただが、その中の学生とのディスカッションは非常に興味深いものとなった。お互いにプレゼンテーションをした上で討論をするという内容だったのだが、私たち会議側は研修のあった6月の時点での自分たちの興味関心を発表した。防衛大側は「第442 連隊から学ぶ差別とマイノリティー」というテーマのプレゼンをして下さり、この機会がなければ得ることの出来ないような知識を私たちは得ることができた。差別を克服した日本人として第二次世界大戦中の第442 連隊を紹介して下さい、制度だけではなく強い意志が差別克服において重要であるというメッセージを訴えて下さった。その後の討論においては固定観念を持つことによる正しい知識の欠乏、そしてそのような知識の無さによる恐怖という感情の発生、それによる差別の発生といった一種の差別形態について話合うことができ、本会議に繋がる有意義な意見交換の場となった。

(橋本萌)



防衛大学校の皆さんと

上智大学 出口真紀子教授訪問

日時：6月29日（土）、7月15日（月）

場所：上智大学 四谷キャンパス

日米学生会議のアラムナイでもあり、上智大学外国語学部英語学科で差別の講義をされている出口真紀子助教授から二度お話を伺った。一度目は参加者たちの興味関心に沿って貴重なアドバイスをくださり、二度目では映像資料をとまって差別問題についてご教示頂いた。私が自身のトピックとして設定した「差別の構造」という、差別問題と向き合う上で最も基礎的な分野において、とても興味深いお話を聞くことが出来た。米国における人種差別や性的マイノリティーに対する差別や偏見が何故生じてしまうのか、そもそも差別とは何か。世間には、差別は自分には無関係だと感じている人や、世の中に存在する差別の現状について全く知らないまま生きている人が沢山いる。出口先生のお話の中にあった「差別なんてない、差別を知らない、ということは、差別された経験を持たないからこそ、自身がマジョリティに属しているからこそ言えること」というお言葉が、とても印象的だった。差別を知らないと言う人は、自分がどこかで誰かを差別している可能性に気づかない、または気付いても、それを無視している人だと、私は考えているが、出口先生のお話で、私がそれまで持っていた意見を再確認出来たと思う。(兼子莉李那)

東京都中央卸売市場食肉市場見学

日時：7月3日

場所：東京都中央卸売市場食肉市場

フィールドトリップで私たちは東京都中央卸売市場食肉市場を訪れ、職員であり部落解放同盟東京連合会品川支部の高城順書記長より直接食肉処理業務に対する差別や偏見に関してお話を伺うことができた。ここでのお話は凄く印象深く、この後の本会議においても大いに役立った。特に印象的だったのは「隠されていることによって偏見が生まれている」「人というのは全員が差別者」という言葉である。肉の流通過程はあえて教えることはないという意図的思惑が結果的には差別の伝承に繋がってしまっていること、また差別を差別している側の見方から考える必要性を訴えて下さった。部落差別という、普段は意識することのない差別形態を東京の中央で学ぶというのは正直ショックでもあり、自分の知識や意識の薄さを感じさせられた。そしてこのフィールドトリップは、学校教育による差別の克服というものを考えるきっかけとなったので有意義であった。差別という一種タブー視されているお話を聞くことのできる非常に有難い機会となった。(橋本萌)



高城順氏と

東海大学 小貫大輔教授訪問

日時：7月16日

場所：東海大学湘南キャンパス

日本におけるブラジル人学校の状況についてのレクチャーを東海大学の小貫先生に聞きに伺った。ブラジル人の子どもたちが直面する現代の言語習得状況についてのお話が特に印象的であった。特に問題だと感じたのは、バイリンガル教育の難しさについてであった。ブラジル人のほとんどは、「いつか母国にかえるだろう」というメンタリティの人が多く、結果的に20年近く日本にいていなくても日本語をほとんど身に付けていない場合などがあるという。逆に、共働きの親をもつ子どもが家庭で母語を使う機会がなくなり、日本語を覚えても母語であるポルトガル語を習得できず、親と意志疎通ができないという深刻な状況もあるというお話だった。ブラジル人学校への支援は、バイリンガル教育を保証するものとしての重要性をもつ上に、日本における言語・文化の多様性、文化交流の促進などにおける有益性をもつものなのではないかと考えた。(大日方望)

朝鮮大学校訪問

日時：7月18日

場所：朝鮮大学校

朝鮮人大学校では、二人の朝鮮大学校の学生の方に、在日としてのアイデンティティや視点について様々なお話を伺うことができた。まず、在日の人の方として、韓国側政府より、北朝鮮の政府のほうに帰属

感を感じ、日本の朝鮮学校はほとんど北朝鮮に帰属しているという話で非常に以外と感じた。在日の方々にとっては、日本にいる朝鮮の人びとを見捨てずにいた北朝鮮政府のほうが信頼できる存在なのだというお話に、これまで自分の見えていなかった在日像というものが見えてきた。それと同時に、日本と北朝鮮間の政治的な緊張関係や、日本における北朝鮮に対するメディア報道などから、日本において北朝鮮のアイデンティティをもつことの特異性を感じた。在日の人びとの存在は日本社会においてマイノリティーでありながらも、朝鮮半島と日本の複合的文化の視点をもつ点で、社会や日本の国際関係に大きく寄与する可能性を秘めているのではないかとここでの対話を通して考えた。(大日方望)



学生のみなさんと朝鮮大学校前にて

沖縄を考える勉強会 牛島貞満氏

日時：7月21日

場所：早稲田大学 戸山キャンパス

故牛島満司令官のお孫さんである牛島貞満様による沖縄戦についての講義に参加した。沖縄自主研修に参加出来なかった分、以前

から関心を持っていた沖縄戦について学ぶ事が出来、非常に有意義なフィールドトリップとなった。自分自身が生まれ育った国の歴史であるにも関わらず、戦時中当時沖縄戦が日本にとってどのような意味を持っていたのか、沖縄戦当時の一般の人々が直面した現実の厳しさ、沖縄戦における集団自決の意味など、文字や言葉で表す事が出来ないほど悲痛な、残酷な日本の歴史の事実について初めて知ることが出来、日本人でありながら沖縄戦の事実について殆ど知らなかった自分を恥じると同時に、戦争を直接体験した人々が高齢化する中、戦争を体験していない世代も、日本人として、敗戦という教訓を後世に伝えていく事の重要性を、身を持って感じた。日米学生会議の参加者として、防衛大学校研修や今回の沖縄を考える勉強会に参加し、日本における「軍隊」や「戦争」という言葉の持つ意味の重大さを、改めて考えさせられた。

(兼子莉李那)

きねがわ皮革工業地帯訪問

日時：7月24日

場所：木下川小学校

部落解放同盟墨田支部の北川京子氏および、産業・教育資料室きねがわの岩田明夫氏のご協力により、墨田の皮革産業地帯である木下川の皮革産業工業地帯に見学へ行った。ここでは日本の豚皮の8割が生産されており、グッチなどのブランド製品のための革の輸出も行っている。この地域一帯は、夏場ということもあり、腐敗臭、にお

いがしていた。お話を聞くと、それは、薬品、脂、骨油などのにおいであるとのことだった。魚屋に魚屋のにおいがあるように、なめし屋にもなめしのにおいがある、という説明には納得できるものがあった。現在、木下川の皮革産業地域に対しては未だに差別が存在しているということだった。インターネット上での写真入りの差別的な紹介文や、直接的な差別電話、また結婚差別などが残存している事例から未だに根強いのだというお話だった。差別に関わりたいか関わりたいかに関係なく、差別とは否応なく向き合わざるを得ない人がいる、というお話が日本におけるマイノリティーの問題について示唆的だった。実際、そこで働いている人たちは、プロとしての「ほこり」をもっている、ということは忘れてはならないことだと感じた。(大日方望)



岩田明夫氏と産業教育資料室さねがわにて

直前合宿

8月1日夜行バスからおりた。直前合宿が始まった。始まった事にいまいち実感がわかなかった。直前合宿の目的はアメデリと合流する前に、これまで行ってきた内容

を総確認し、まとめることで今後の本会議のイメージをつくり、8月2日にジャパデリ全体で共有することであった。そのため、まずは、リサーチ、FT、これまでの勉強会について、分科会のメンバーと共有した。その中で共通項を探り、分科会としてこれまで考えてきたことをまとめた方向性について議論した。議論の中で、全てのマイノリティー問題の共通は、正しい情報の不足であり、さらその原因は、「寝る子は起こすな」という考え方が背景にある考え方があるという見解をだした。以降の本会議の議論において、その視点をフルに活かした。

(大野 峻典)

■本会議中の活動

第1サイト：京都

京都。ここで本会議がスタートした。分科会活動も始まり、まず自己紹介から。最初は皆緊張していた様子。みんなお互いの顔を伺いつつ。活動の内容としては、まずはお互いの RTpaper の内容を共有とそれに関する質疑応答。方法は、RT バディの paper を紹介するというもの。Paper を紹介する中で、お互いに、その内容に関する打ち合わせをした。それを通し、それぞれのテーマ：(人種差別、在日差別、部落差別、性差別、障害者差別、etc) に関し、知識を共有し議論で理解を深めた。また、京都では LGBT に関する FT として Colori café にお邪魔した。性的マイノリティー問題に関して声をあげられている当事者の方とのつながりが、その問題に関する僕らの当事者意識を変えてくれた。最後に、長崎サイトで

のタレントショーに向け、韓流ダンスの練習に励んだ。これが僕らの分科会の絆を強め、以降の分科会活動をより充実したものにしてくれた事は言うまでもない。

(大野峻典)

Colori Café 訪問

日時：8月4日

場所：京都市内 Colori Café

Colori Café とは、レズビアンである方が作られた café で、性的マイノリティーの方々のコミュニティを作っている cafe である。今回は RT で性的マイノリティーに関する問題を考えるにあたって、お話を伺いにいった。伺ってみると、店長の吉田香織氏と、常連のお客さんたちが出迎えてくれた。僕たちとの議論のために、場をセッティングしてくれていた。おかげで、そこで、性的マイノリティーに関する当事者としての意見をお聞きしながら議論を深めながら考えることができた。特に印象に残ったのが、店長さんらが、性的マイノリティーとして声をあげ、意見を発信している事であった。寝る子は起こすな。日本人の見て見ぬ振りをする文化を打開するためには、マイノリティーの当事者の声は特に効果的な意味を持つ事を感じた。僕らにとって、性的マイノリティーの方の存在は、もう既に実感を伴っていて空想上のお話ではない。机上のみではなく、実感を伴えたのは、彼らの声をあげる協力ありきである。実感を伴い理解する事は、人の問題への意識を深く変える。そういった機会が、日本でも増えていけば、マイノリティーに関する態度

は変わってくるだろうと感じた。Colori Café の皆様には本当に感謝しております。

(大野峻典)

第2サイト：長崎

長崎の分科会活動では、それまで RT paper に基づく各々の分科会のテーマに関する問題意識の共有をふまえ、今後の RT タイムの時間の使い方を決めた。今後特に議論を深めるべき題に関するブレインストーミングとファイナルフォーラムに向けた時間の取り方を簡単に決めた。以降はそこで決めた議題に関して話し合う事を中心に行った。話し合った内容としては：personal experience, 在日問題、性差別についてである。それぞれの問題に関して、議論を深めた。特に personal experience に関しては、お互いの差別やマイノリティーに関する経験をシェアし、互いの理解を深めるのにキーとなった。もう一つ、分科会活動の本筋とはそれるが、タレントショーにて分科会のメンバーが中心となって、ダンスを踊った。楽しい時間を共有した事も互いの絆を深める良いきっかけになったと思う。

(大野峻典)

第3サイト：岩手

岩手では、まず職場におけるジェンダー平等論についての議論を行った。女性の家庭における位置づけと会社における位置づけが議論され、社会における固定化された女性の役割があるのではないかと、ということに議論の的が当てられた。この問題を解決していくためには、男性の家庭における重要性も主張される必要があるというアイ

デアも示された。次に、LGBTの社会的受け入れについての議論がなされた。文化圏ごと捉え方の違い、現代日本におけるメディアの表象の仕方、またアメリカにおけるセクシュアルアイデンティティのオープンさの特徴などを主軸に議論が発展した。教育RTとの合同議論も行い、差別の問題と教育の関係について意見を交換した。

(大日方 望)

第4サイト：東京

東京では、主にファイナルフォーラムに向けての準備のために、これまでの議論を集約する作業に入った。これまで行ってきた議論をいかにひとつのプレゼンテーションとして形作るかということについて、様々に意見を交わすなかで、共通してどのトピックにも現れたテーマ、メディア、人対人の交流、トップダウンーボトムアップ、三つのテーマが説明される形で全体を構成することにした。スキットを交えながら実際の議論の風景を演出することにもした。前日には、深夜過ぎてまで作業を行い、なんとかスライドや原稿を用意することができ、翌日のファイナルフォーラムに臨むことができた。(大日方望)

ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムにおいて私たちが一番こだわったのは「自分たちらしさ」を出すことである。私たちの中では、やはりマイノリティーと差別RTは他のRTとは少々違うという意識が強く、その違いを発表で出していくことが何よりも重要と考え

た。その違いとは体験に基づいて討論が進むことである。勿論ある程度の事前勉強は重要だが、それよりもそれぞれのメンバーの個人的体験が1ヶ月間の討論の軸であり、その点が自分たち分科会の一番の強みだと言えた。そこでたくさんの話し合いを重ねて行き着いた発表方法がスキットを使うというものであった。実際のディスカッションをファイナルフォーラムの場で再現することによってどのように話し合いを進めていたのかを伝えるという方法だ。事前に練習も必要であり正直楽ではなかったのだが、十分マイノリティーと差別RTらしい発表が出来たのではないかとと思っている。また、私たちはほぼ毎回のRT timeで別のテーマについて話し合っており内容が莫大であったために、15分という短い時間の中で何を扱うかについてかなり悩んだ。結局は毎回のテーマの共通点であったMedia, Interaction, Top-down / Bottom-up approachという3つの軸を基本として、そこから派生させて小テーマを発表していくという形式に落ち着いた。この3つの軸に辿り着くまでかなり話し合った上に意見の衝突もあった。ファイナルフォーラムについて話すまでほぼ衝突のなかった私たちRTだが、ここでかなり揉めたのは全員が最高のファイナルフォーラムをしたいという強い思いを持っていたからだと思う。結局ファイナルフォーラム前の3日ほどは深夜遅くまで皆で起きながらプレゼンを作ったのだが不思議とこれは苦ではなかった。1ヶ月真剣に向き合ってきた仲間とその成果

を出すための活動となると皆が意気込んでおり、かなり楽しかった。私たち10人にしかできないようなファイナルフォーラムをすることが出来、良い1ヶ月の締めくくりが出来たと思う。(橋本萌)

分科会感想文

【兼子莉李那】

この第65回日米学生会議に応募した際、マイノリティーと差別の分科会は私の第一希望だった。それは、障害者というマイノリティーの立場から、そして障害者でありながら一般の学校で健常者と共に学んできた経験から、差別する側、される側両方の立場を理解することが出来、そこから発信出来ることがある、との考えからだった。本会議を終えた今、私が思うことは、当分科会の活動において、私は今まで口にする事のなかったような自身の差別体験や、マイノリティーの立場として抱いてきた複雑な感情等も話す事が出来た、という事である。議論を進めるうち、議題により、他の参加者の発言により、時には日本語・英語に限らず、言語で表すことが困難な感情を抱くこともあったが、他の参加者の「理解したい」「知りたい」という気持ちに支えられ、普段は口にすることも諦めてしまうような、私が障害者として日常生活で抱いている複雑な感情等を出来る限り伝えたいと思う事が出来、自分の持てる能力を最大限に発揮して伝えることが出来たのではないかと思う。分科会メンバーが見せてくれた私の言葉を受け入れて理解しようとする

態度は、私に「発信することの大切さ」を改めて教えてくれた。当分科会での活動を通して、今後は様々なマイノリティーに関する知識を増やすとともに、自身のマイノリティーとしての立場を生かして、周囲のマイノリティーの声に注目し、それを発信していきたいと、改めて感じた。

【大野峻典】

差別とマイノリティー分科会では、様々な社会的なマイノリティーの生きにくさ、差別に関して、その問題となる理由から、いかに解決していくべきかなど、広く自由に議論した。この分科会で特徴的だったのは、全てのメンバーがある意味この分野に関するスペシャリストであったことである。というのも、この分科会では、パーソナルな問題を多く取り扱ったため、自身のバックグラウンドに基づいて意見を言う事が多かったため、それぞれがそれぞれの経験に基づいて正直な思いをぶつける事に意味があり、それが求められていた。それもあってか、分科会内の仲間は、自分のコンプレックスとなるような体験迄打ち明けられるような仲間になった。分科会活動を通して、得られたものは、多様性に対する受容力と、最高の仲間だった。そもそものJASCに僕が参加した目的は、多様性の中で他者との相互理解のためであった。まさにそれが達成されたと言える分科会活動だったのではないかと思う。また、一生大事にしたい仲間ができた。一緒に過ごしたのは、ほんの一ヶ月。ほぼ地球の反対側で過ごすのは、

今後の数十年も。それでも、一生のつきあいと思える仲間ができたことに感動した。多様性の中での深い相互理解は、今後の人生のライフワークにしていきたい。まだその具体的な形はわからないので、これから考えていきます。分科会は人生を変えました。

【大日方望】

RTでは、約4ヶ月間活動した中で、多くのものを得たように思う。まず仲間が挙げられる。日本側もアメリカ側も、自分のRTでは、多様性をもった人びとが集まっており、お互いの長所を活かし合うことができた。個人個人が集団として、それぞれがより大きな力を発揮することができた分科会だったと感じる。65回の絆を分科会としても今後も継続させていきたい。第二に、自分自身の変化と成長が挙げられる。マイノリティーと差別についてのトピックと向き合うなかで、やはり自分自身の価値を試す機会を多くもったように思う。実際の人との関わりや、自分のトピックの研究や、RT内でのディスカッションのなかで常に自分と向き合い、また分科会のメンバーと向き合った。結果として、自分は希望を持ち、時には妥協したのかもしれない。しかし、それらの全てが今の自分を作り変え、成長させてくれたと信じている。最後に、自分がグループで本気で取り組んだことから得られた自信がある。自分の色を、自分の興味を突き詰めて、足を運び、RTのメンバーと議論し、充実した時間を過ごせたことは、

自分の大きな努力の成果でもあると思う。この経験を、今後の分の糧としていきたい。

【橋本萌】

マイノリティーと差別というテーマは普段の生活の中ではある意味タブー化されているものである。私たちRTの目標は、隠された事実を“明るみに出す”こと、let the sleeping dog lie theoryを覆すことであり、社会への発信というものが出来たかは疑問だが少なくとも私たちの中では様々な社会的マイノリティーについて今自分たちの出来る範囲で議論することができ、社会へ発信するための第一歩を踏み出したのではないかと思っている。このRTでの収穫は、今まで一言で「差別」と聞いたときに自分では連想しなかったような話題についても議論し、自分の視野の狭さを認識できたこと、更に何でも言い合えるような仲間を得ることが出来たことである。私自身、この会議が始まるまでは差別と言えば人種差別という固定概念を持っていたが、本会議では女性やLGBT、障害者、部落、外国人、琉球沖縄など多岐にわたるマイノリティーに対する差別についてディスカッションすることができた。無意識に自分も行っている差別が存在することに気付かされ、非常に有意義であった上にこれからの生活において度々役立つであろう気付きとなった。また、RTメンバー全員が何らかの差別に関する体験をしており、話にくい内容ではあるがそれを互いに共有することでメンバーの絆はどのRTよりも固いと自信

を持って言える。このような仲間と出会えたこと、1カ月間向き合うことが出来たことで私にとってこの夏はlife changingなものとなった。

■分科会総括

「この住みにくい日本を変えていこう」
第64回会議のメンバーからもらったこの言葉が、マイノリティーと差別分科会を創る原動力となった。

なぜ住みにくいのか？アメリカから日本への留学生であるそのメンバーからの問いを追求していくと、単一的にみえ、何事もないようにみえる日本の隠れた問題性がだんだんと表れてきた。そこで、日米という異なる二つの社会の問題に取り組み、異なる「めがね」を持って自国のことをもう一度みる。そうすることで、「今までみえてこなかった問題をみえるようにする」ことが可能なのではと考えた。そして、何よりも学生だからこそ、この社会的にはタブー視されがちな問題に対して率直な議論が実現できると考えた。まだ社会に出ていない、企業にも属さず、公務員でもない、色が付いていない学生だからこそ何物にもとらわれず、自分自身が獲得する「レンズ」でマイノリティーと差別の問題を捉え、解決策に取り組む必要があるのではとの想いのもと当分科会はスタートした。

当分科会の参加者は誰一人として同じではなく、誰一人欠けても当分科会は成り立たなかったと言えるほど、各々が強い個性を持ち、熱心に分科会活動に取り組んでく

れた。自分自身の問題関心について勉強会を開き、フィールドトリップを積極的に企画した参加者は、当初こちらが抱いていた不安を消し去るほどしっかりと自分の軸を持つ人材に大きく成長した。本会議では、日本以上に多様性のあるアメリカ側と合流しても真摯な議論を貫き通し、深夜にまでわたる議論に誰一人嫌な顔をせずむしろ真剣に取り組む姿勢には頭が下がる思いだった。部落問題、在日朝鮮人問題、性的マイノリティー、アフリカンアメリカン、障害者差別、沖縄問題、差別の構造など、いわゆるタブー視されている様々なテーマに果敢に取り組み、ファイナルフォーラムでは差別にはどのような問題があり、解決に向けてどうアプローチしていくかを、マイノリティーと差別分科会らしく伝えてくれたかのように思える。

差別問題について「寝る子は起こすな。」という、問題を隠す姿勢ではなく、きちんとした情報共有により、この社会に生きる全員が当事者であり課題について考えていく必要性を唐文化会は主張した。だが、この分科会で3ヶ月間話し合った事が、これまでの既存の議論の枠組みを越えるものであったかどうかは定かではないし、恐らく越えるものではない。分科会メンバー全員が一致して出した結論によって、今すぐに日本の、アメリカの、世界の現状が変わるわけではない。しかしながらそれでも、この分科会の経験を活かし「マイノリティーと差別」の問題について考え続け、周りに影響を与え続け、そしていつの日か、問題

の解決に向かうムーブメントが起きたときに、その解決の意志を持つものが今回の分科会の参加者であるとすれば、この一ヶ月の議論は時間では推し量れない価値を生み出したといえるだろう。

議論の成果の他に、上辺ではない真の意味の相互理解が実現されたことが当分科会の最大の成果であった。個人の体験に基づく議論という衝突するテーマが多く、英語での議論という難しさがあるなか、分科会メンバー10人全員が最後まで仲違いを起こさず、むしろ仲の良さを深め、真摯に議論をしつつもお互いへのリスペクトの気持ちを根底にもち続けてくれた事に心から感謝するとともに、そんな分科会を担当できたことを本当に誇りに思う。今後も関係を持ち続け、心から信頼できる友人として、お互いを支え合う関係を続けてくれたらと切

に願う。

最後になりますが、フィールドトリップを快く引き受けてくださった皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。皆様のご協力ご尽力なしにはマイノリティーと差別分科会は実現しませんでした。本当にありがとうございました。そして、私のつたない英語に辛抱強く耐え、本会議では私以上に分科会を引っ張ってくれた RT パートナーの Katherine、至らない点が多々ありつつも最後までついてきてくれた RT のみんなに謝意を表したい。当分科会にご協力をいただいた全ての皆様に心より御礼申し上げます、本当にありがとうございました。(市毛裕史)



情報技術と文化

Culture and Technology

■分科会メンバー

ヴーホアンミン*

伊井佐織

鈴木悠司

関口響

三科圭介

Nobuko Masuno*

Drew Korschun

Kelly Cargos

Bao-Quyen Nguyen

Robert Ken Panis

(*は分科会リーダー)



■分科会概要

情報技術の急激な発展により、人と人の関わり方に大きな変化が起きている。例えばこれまで、人間は直接会って表情や身振り、視線などといった非言語的要素をまじえたコミュニケーションをはかってきたが、ソーシャルネットワークキングサービスやEメールの普及により人々は対面コミュニケーションだけではなく、非言語的要素の欠けた非対面コミュニケーションも頻繁に行うようになった。また、インターネットや様々なソフトウェアの普及により誰でもネット上にある他人の作品をダウンロードし、それらを引用、再構築して、簡単に異なった作品として作り直すことが可能となった。このように情報技術は人間の生活や文化の発展に欠かせないものとなったが、非対面コミュニケーション

ンであるが故に安易に横行するネット上のイジメや他人の作品を作り直す表現技法が著作権を侵害することなど数々の問題が生じている。当分科会では、このような情報技術が人間社会にもたらす功罪について検討し、我々人間がどのように情報技術と向き合い、活用していくべきなのか考察する。

■事前活動

春合宿

初めての顔合わせとなった春合宿では、まずひとりひとりがどんな関心をもって「情報技術と文化」という分科会を選んだのかを話し、個々人が活動にどんな期待を抱いているかを共有した。その上で、「情報技術と文化」というテーマの定義付けを行い、これからの分科会活動の方向性を話し合った。「情報技術」「文化」2つの言葉に分け、改めて情報とはなんなのか、文化と

は何か、をお互いの興味分野を基に独自の観点で意見を出し合い、議論することを通して、テーマの背景にある問題や現状等の共通認識を持つことができた。そして同時に、春合宿という短い期間の中でも初対面同士の仲を深められた。とりわけ興味深かったのは、分科会員に理系の学生がいたことにより専門的な目線で定義を見つめ直すことができたという点である。また最終的には、ファイナルフォーラムをどう行うかの意見交換も行われたので、かなり早い段階から当分科会が目指す到達地点を視野に入れながら議論ができたと感じた。(関口響)



春合宿にて

定例ミーティング

定例ミーティングは毎週誰も欠けることなくスムーズに行われた。議題と所要時間を分科会コーディネーターが設定した上で、分科会参加者がタイムキーパー役と議事録を当番制で担当して議論は行われた。まずは情報史に関する洋書を購入し、チャプターごとに英語で要約した。それら共有する中で「情報」というもののルーツや変遷をお互いの共通理解として認識できた。その後、RT ペーパーの作成に主に取り掛かった。各自の「情報技術と文化」に関連する自分の意見を英語の小論文にまとめ、共有する

ことは、お互いがどんな関心や視点を持って本会議に臨もうとしているのかが窺えて大変有意義であった。実際に、米国側参加者と Skype を通してジョイントミーティングを行った際には、事前に両国側の個々の意見が固まっていたが故に、本会議での分科会議論の方向性を見出すことが出来たように思える。結果として、本会議開始後も興味関心の内容をお互いに知っていたからこそ、無駄な時間がなく好調な滑り出しで議論をすることができた。(関口響)

世界 ICT サミット

日時：6月10日（月）

場所：日経ホール

2013年6月10日、情報技術の最先端を走る国内外の IT 企業の方々のお話を伺うため、日経ホールにて行われた世界 ICT サミットを訪れた。クラウドコンピューティングやソーシャルメディア等の新しい情報技術の登場により、ネットワーク上の情報は爆発的に増え続けている。この大量の情報が溢れている今日の社会で、今後人々はどうのように情報を共有し、活用して行くかを企業側の目線で学ぶ貴重な機会であった。同時に、スマートフォンの普及によって人々のワークライフバランスが変わったことを例にとるように、情報技術の発展は企業の経営戦略にとどまらず、国家のあり方、そして個人の生き方にも多大な影響をもたらすと感じた。企業の方々によるお話を通し、「クラウド」や「ビッグデータ」と言った今後の情報技術において重要となるキーワードを得ることで、その後の分科会議論における重要な示唆となった。(伊井佐織)

中村仁彦教授訪問

日時：6月8日（土）

場所：東京大学

私たちは「情報技術と文化」というテーマを扱う上で、「技術」の最先端を研究している方がどのような考えを持って研究を進めているのかを伺うため、東京大学情報理工学系研究科知能機械情報学専攻の中村仁彦教授の研究室を訪問した。中村研究室では主にヒューマノイドロボットについて研究しており、はじめに研究室のロボットや実験の様子をデモンストレーションで見せていただき、その後「情報技術と文化」について中村教授と議論した。その中で、科学技術と社会の繋がりについて触れたときに、「人類はこれまでに科学技術の進化を吸収して社会を変化させてきた。人類の柔軟さが、科学技術で社会をどう変えるかに注目したい。」という中村教授の考えが印象に残っており、研究者の視点から見た「情報技術と文化」についてのお話を聞いたことは非常に有意義だった。お忙しい中、私たちを研究室に招いてくださった中村教授には改めて感謝の意を表したい。（鈴木悠司）

直前合宿

直前合宿では、それまでの事前活動で学んだことをまとめ、本会議でどのような方向性で議論を進めていくかを定めることに集中した。防衛大、ICT サミット、中村研究室という3つのフィールドトリップのまとめや、日米両側の参加者のRTペーパーの内容を整理し、これまでの進捗状況や今後の方針を他の分科会に共有するためのプレゼンを用意した。これにより自分たちがこれまで取り組んだことを振り返り、本会議に向けて士気を高めることが出来た。本

会議での議論の方針については分科会内でも最後まで意見がまとまらず、意見の食い違いも生じたが、本会議に入る前に各メンバーがどのように分科会を進めていきたいかということをきちんと話し合う機会が設けられて、本会議を迎える心の準備がしつかりと整えられたと思う。（鈴木悠司）

■本会議中の活動

第1サイト京都及び第2サイト長崎

5月の春合宿から始動した「情報技術と文化」分科会は、京都サイト一日目の8月2日に、初めて10人全員が顔合わせをした。まずは、日本側とアメリカ側参加者がそれぞれ事前活動で学んだことをお互いにシェアするところから始まった。そして本会議を通してどのような目標を持ち、議論を進めて行くかについて話し合った。最終的に、「日米学生会議だからこそ出来る議論を大事にしたい」というメンバーの共通の想いから、第2サイトが終わるまでは自分達が話したいトピックを持ち寄り、フリーディスカッションを行うという結論に至った。トピックとしては、「情報技術の教育への影響」、「情報技術が人間の健康を支える近未来」、「SNSによるコミュニケーションの変容」など、様々なことについて議論した。第2サイトの長崎では、被爆者の方から体験談を伺ったことで、「情報技術の平和への貢献について話したい」という声が挙った。例えば、今後年数を重ねて行くにつれ、実際に原爆を体験した方々の生の声を聞くことが難しくなってくる現状において、後世に伝えていく手段として情報技術が果たす役割について、お互いの意見を出し合った。各サイトで日々学び、感じたことを分科会

に活かすことが出来たため、非常に有意義な議論であった。(伊井佐織)

第3サイト岩手及び第4サイト東京

第3・4サイトの岩手と東京では、ファイナルフォーラムに向けての準備活動が主だった。振り返ると、第三サイトが一番RTのチーム力が問われたサイトだったと思う。なぜなら、当初の予定では、岩手でファイナルフォーラムのプレゼンテーションのスライドを作り終える予定であったが、メンバー全員の意見も揃わず、テーマも決まらない状態でRTの雰囲気も良くなかったからだ。しかし、京都と長崎で行ってきたフリーディスカッションをまとめていく中で、理解が深まり、福島でテーマを決めることが出来た。東京サイトでは、ファイナルフォーラムに向けての最終準備が主な活動となり、テーマに沿ってスライドと台本を作った。そしてファイナルフォーラムを行い、残りの2日間は限られた時間の中で多くの事を語りあい、沢山の思い出を作ることが出来た。そして最終日には、全てのサイトでのRT活動を思い返し、心の底からCTRTRのメンバーの一員になれたことを誇りに思った。(三科圭介)

ファイナルフォーラム

3週間に渡る本会議の、いや、5月からの4ヶ月に渡る第65回JASCの集大成とも言えるファイナルフォーラム。「情報技術と文化」分科会は7つの分科会の中で最後の発表順であった。私たちの分科会では、本会議が始まった当初からこの日を見据えてどのように分科会活動を進めていくかを意識していた。それによって様々な対立や意見

の食い違いも生じ、すべてが順風満帆だったわけではない。しかし、ファイナルフォーラム当日には各々がこのJASCを通して学んだことを振り返り、それを自分たちの言葉で伝えるということに向かって力を合わせていると実感できた。ファイナルフォーラムのプレゼンテーションでは、今振り返ってみても反省点はたくさんあり、100点満点のものでは決してなかっただろう。だが当日の発表の出来以上に、それに向かって分科会の10人でJASCに取り組めたことをとても光栄に思う。(鈴木悠司)

本会議総括

本会議で学んだ事は、大きく分けて二つある。一つ目はアメリカ側と日本側の議論の形式が違うことである。分科会のミーティングに於いて議論を交わすのに上手く進まないことが多々あり、その原因は議論形式の違いであった。日本側は、最終フォーラムに合わせて計画を決めて議論を構成立てて進めようとしていた。それに対しアメリカ側は、フリーディスカッションで議論を進める事を好んでいた。フリーディスカッションになれていない私は最初戸惑ったが、計画を立てないことによりストレスフリーの環境で議論することが出来た。また構成立てて議論するよりもはるかに進み具合が良かった。その一方で、フリーディスカッションをどのように利用し、コントロールすべきかを考えさせられた。最終的には日本の計画的な議論形式とアメリカのフリーディスカッションを使いお互いの良さを活かしながら議論を進めることが可能になった。このように議論形式が異なることを知り、それをどのように扱っていくべき

かを学べたことは、これから私達がグローバルな人材になる上でとても大切なことだと思う。二つ目は、議論の内容である情報技術について述べる。議論を通して一番感じたことは、情報技術の差である。議論する中で情報技術においてアメリカが日本より進んでいる再確認できた。その例として、日本の「SNSによるいじめ」の問題を議論しあった際に、アメリカ側ではこのようなことは数年前に問題として取り上げられていたと言っていた。このことを考えると現在、日本はアメリカと同じ道筋を辿ろうとしている様に思える。つまり、二の舞にならない様にアメリカから多くの情報をもらい予防策を考えるべきである。このように議論を通して日本における情報技術に関する問題の解決策を考えることが出来た。このような素晴らしい機会を与えて頂いたことに感謝したい。(三科圭介)

■分科会感想

情報技術と文化。日米学生会議が始まるまでは真剣に考えたことが正直言ってなかったこのテーマに、四ヶ月間真正面から向き合った。マイノリティと差別や環境問題など、問題意識が明確なものが大半を占める当会議分科会の中で、我々が扱った「情報技術とそれが文化にもたらす影響」という議題は、極めて異質な存在であったと感じる。異質であったからこそ感じた難しさがあったが、同時にやりがいもあった。

TwitterやFacebook等のSNSのように、今や私達の生活に根付いている情報技術は数多く存在する。そんな中、スマートフォンを弄る手を一旦休め、自分の掌に乗っているその小さな機械が自分にとってどのよ

うな価値を持ち、将来どのような役割を担って行くかを改めて考え直す、それこそが当分科会の意義だったのではないだろうか。

春合宿当初はまだ浅かった知識が、フィールドトリップや毎週行われたSkypeミーティングを通して厚みを増し、各々の興味関心も定まって来た。そして本会議に突入し、アメデリが加わったことで議論の雰囲気はまたガラリと変わった。日本側とアメリカ側の議論の進め方の違いから、本会議の初めは戸惑う場面もあったが、互いに正直でオープンな関係でいれたからこそ乗り越えられた。本会議中に最も印象的であったのは、各々が議論したいテーマを持ち寄って行ったフリーディスカッションである。

iPadを用いた教育から介護ロボットまで、とにかく自由に議論をし続けたあの時間が、素直に心から楽しかった。社会にまだ属していないまっさらな学生だからこそ素直に思ったことを発し、時には意見をぶつからせ、時には共鳴し、多様な価値観に触れる。これこそがJASCの真髄であると感じた。

私は、人前で自分の意見を伝えることを敬遠してしまいがちであるため、スピーディーな議論の中で上手く意思表示が出来ないこともあった。第三サイトの岩手で議論が一時スランプに陥った時も、解決策を見出すことができない自分に苛立つばかりで、分科会に貢献しきることが出来なかった。そんな息詰まった状況でも、目の前の問題から逃げずに、ひたむきに前に進もうとする仲間の姿を見て、感銘を受けた同時に自分の未熟さを痛感した。「自分は果たして分科会に貢献出来ているのか」と、自信を喪失しかけそうにもなった。しかし、そんな中で私を書いた事前レポートにメンバーが

興味を示してくれて、議論に活用出来たのが自分にとって大きな成果であった。ビッグデータに対する興味から様々な文献を漁り、沖縄自主研修から帰って来た日から三日間図書館に籠った甲斐があった。

唯一の理系ならではの新しい視点で議論を盛り上げていたゆうじ。その穏やかな人柄と愛嬌のある日本語で RT に笑顔をもたらしてくれた Drew。誰よりも他人を見て、思いやっていた K。Final Forum のために最高のプレゼンを徹夜で作りに上げてくれた Quyen。文化への愛が人一番強く、面白いアイデアの宝庫のサム。一見クールに見せて誰よりも熱いハートを持つ Ken。ひまわりのように明るく、書記として議論をリードしてくれた Kelly。そして最高の RT リーダーの二人。時には優しく、時には厳しくアドバイスをくれた CTRT の母、のぶこ。そして最後に、彼が RT リーダーであったからこそ私はこの RT が大好きになった、我らがミン。一人一人の個性、魅力、そして才能があったからこそ私も身を引き締め、頑張ろうと思うことが出来た。この場を借りて、本当にありがとう！

この分科会活動を通して、知識面のみならず人として少しは成長できたのではないと思う。回帰分析をして統計の数値ばかりを追う学生生活の中で忘れかけていた「人対人」の素晴らしさ、そして大切さを、改めて感じる事が出来た。(伊井佐織)

5月の春合宿で第65回のJASCが始動してから8月の本会議まで、JASCを通して様々なことを学んだが、その中でも一番多くの時間を過ごし、一番多くのことを学んだのは分科会の活動である。「情報技術と文

化」という、広大な範囲に及び、捉えどころのないテーマには最初から最後まで苦戦し続けたが、それでも日本側・アメリカ側参加者とこのテーマについて議論することは非常に楽しかった。

分科会活動でのディスカッションを通して得たものはたくさんあるが、自分の考えを言葉にして、相手にわかりやすく伝えるという姿勢が身についたということは非常に大きい。「情報」や「文化」の定義付けから始まり、情報技術は文化にどのような影響を与えていくかといった内容を議論する際にも、自分の意見をうまく表現できずにもがいている中で、他の参加者から発せられる考えに大きな刺激を受けることもあった。また、ディスカッションの進め方を巡っても意見が対立し、思い通りに進まずに苛立つこともあった。しかしそれらすべての活動において、「自分はどうか」という考えを述べる機会が十分に与えられ、そのたびに自分の考えをたどたどしいながらも言葉にしようとする過程を経て、会議の終盤には自分の本心をきちんと言葉にして伝えられるようになっている自分がいることに気がついた。

今後とも関係を絶やさずになりたいと思える友達を分科会内で得られたことを非常に光栄に思う。(鈴木悠司)

「情報技術と文化」という分科会での四ヶ月に及ぶ活動は私自身に多くの学びを与え、考え方や価値観に影響をもたらした。主に挙げられるのは議論の仕方である。英語スピーチの経験があった私は、個人活動として意見を論理的に構成し主張することあまり障害はなかったのだが、他者と双

方向に意見交換が行われるディスカッションでは、自分の意見を妥協しつつも主張することが時に求められたり、斬新な他者の考えを興味深く受け入れたりすることが多々あったのは初めての経験で非常に新鮮だった。そして、本会議前の日本語での議論を通して、ディスカッションの基礎をある程度養った上で臨んだ、本会議でのアメリカ人学生との議論ではまた新たな刺激や葛藤が生じた。まず言語の壁が立ち塞がり、日本語で思うように言えたことが言えなくなる場合や、初めて味わう聞き取れない程度のネイティブスピードの英語に始めの頃は戸惑いを隠せなかった。しかし、アメリカ側の学生と議論以外の時間で親睦を深めるうちに、言語的な障害は彼らが日本側に合わせ始めるようになり、議論の流れに付いていけない様子を察して手助けしてくれるようになった。こうして次第に問題は解消されていき、いつしかディスカッションの雰囲気は和やかなものになり、その時間は両者にとって待ち遠しいものとなった。加えて、私はアメリカ人流の議論の仕方や、彼ら独自の価値観を意見交換の中で学ぶことができた。こうして、分科会での「議論」を通して培った能力や経験は、いずれの言語にせよ、これから私が他者と意見交換をなす際に大きく役立つことだろう。(関口響)

分科会を通して学んだ事は、「異文化対応能力」である。本会議が始まる前まで、日本側のみでの議論は比較的上手く進んでいた。しかし、本会議が始まり議論が上手く進まない日が多くあった。その大きな原因は米国の国民性や文化を知らないことであった。日本人と接するようにアメリカ人と

接していてもアメリカ人の良さを引き出すことが出来なかった。そこでは、アメリカ人を深く理解することが求められていた。例えば、議論の中で何かを決める際にアメリカ側はリスクを恐れずに決断するため判断がとても早い。それに比べて日本側はリスクを考えるために判断がとても遅い。実際にこのようなケースを体験した。議論中にある提案をした際に、リスクを考えずに判断したため判断は早かったが、その提案は後に取り消しとなった。従って、日本の「リスクを考える」とアメリカの「判断の早さ」とのお互いの良い点を効率的に扱うことが必要である。またこのような考え方の両方を持つことが出来れば、どの国でも通用する「グローバルな人材」になれるのだと思う。このように分科会を通して「異文化対応能力」の重要性を学ぶことが出来た。このような素晴らしい機会に感謝したい。(三科圭介)

■分科会総括

「情報技術」と「文化」、その後ろには幅広い意味を持つこの二つの言葉は、その言葉の意味以上に私達に多くの事を教えてくれた。インターネット、SNSやビッグデータなどといった情報技術の急激な発展に伴う、人間文化に新しく生まれて来る様々な問題について話し合い、技術と文化のあるべき関係を見いだすことを目標にし、「情報技術と文化」RTは分科会活動に臨んだ。「情報技術と共に育ってきた」とも言える私達の世代が、情報技術が人間に与える価値を見直すことは不安に感じさせると同時に、とても興味深いものでもあった。分科会をコーディネートしていくなかで、

「今ここで話しているこの話がどういった意味を持っているのか？」という質問を常に意識し、RTメンバーのディスカッションを聴いていた。情報技術によって生じる多くの問題については話したが、もちろんここで話したって社会はそう簡単には変わらないと感じていた。しかし、「何かを変える」ことなのではなく、「何かを変えなくてはならない」という「気づき」、そしてそれを「見直す」ことこそがこの議論の本当の意味なのではないかと、ファイナルフォーラムを直前にこの分科会活動の価値に気づいた。第一開催地の最初の RT タイムから気づいた：ベストの RT メンバーを持った。RT パートナーの Nobuko も同感だった。

議論をいつもリードしてくれる積極的な Kelly と独特なセンスを持つ Quyen。議論の根本的なポイントから必ず話し合いの方向性をずらせさせないけい。議論の反論役をしてくれる Ken。新しいアイデアを次々と出してくれる Drew。

議論を整理、中和してくれるサム。皆が常に同じラインにいることを確かめてくれるゆうじ。日本側参加者とアメリカ側参加者の意見を繋いでくれるさおり。そして分科会の議論の進捗状況を鋭く見極める RT パートナーの Nobuko。

ベストの RT メンバーを持ったという確信は最後までかわらなかった。皆からも沢山学ぶことがあった。

このメンバーで活動できたことを心から感謝している。

最後になりましたが、分科会フィールドトリップを快く受け入れて下さった皆様、ご協力して下さいましたアラムナイの皆様、第64回の実行委員のみなさん、1年間に渡り多大なるご支援とご協力を下さった全ての皆様に心から感謝を申し上げます。

第65回の参加者の皆、共に第65回を企画してくれた実行委員、有難う。そしてこれからも宜しく。

(ヴァーホアンミン)

